
境界線上の幻想郷

葛根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境界線上の幻想郷

【Zコード】

Z7538Y

【作者名】

葛根

【あらすじ】

たぶんハーレムになると思います。

時空系列など気にしたら負け。

基本的に軽いノリで読んでいただけると助かります。

なお、原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第一章 境界線内の幻想達（前書き）

独自の解釈やキャラ崩壊がありますのでそれらが気になる方にはオススメしないです。

それでもいいよって方で、読んでもいいよって思つていただける人は続きを読むをどうぞ。

第一章 境界線内の幻想達

霧雨魔理沙とパチュリー・ノーレッジの間に男がいる。
紅魔館の図書館、その一角にテーブルや椅子があり、机の上にはソファーや簡易ベッドまである。

何故、二人の間に男がいるかという疑問に答えるなら、二人に取つてその男は必要な人間だからだ。

「所でツムグ、まだ、靈夢の神社に居候してゐるの？」

「そうだぜ。人里で家を借りろ。いや、香霖堂に世話になれよ」

何度もこのやり取りはしたことがある。
しかし、答えはいつも同じで

「靈夢は放つておくと碌な食生活しないし、怠けるし、腋だして
し。ま、放つて置けない駄目娘だめこなんだよ」

博麗靈夢は自堕落な駄目巫女だ。

幻想郷において重要な役割を果たしてゐるはずなのだが、本人はあまり判つていな様子である。

異変が起きている時の勘の良さと働きつぶりの一割でもいいから平時の時に分けると言いたい。

だから、変態八雲紫に馬鹿にされるのだ。

「放つて置けないつてなあ。アレはもう直らないんだぜ？」

「ひどい事いつなよ。月に一回位は神事だつて、やるよつたなつたんだ」

以前は思いつきでやる程度の神事を月一に行つまでに改善した。とはい、人里にふらりと訪れて古い屋みたいなことをすることもあれば、悩み相談を聞いたり、妖怪の話を聞いたりする曖昧な仕事だ。

実際、神事に関わる禊みそぎやお祓いは幻想郷においてあまり重要ではなかつたりする。

なにせ人間と妖怪が共存しているのだ。

宴会を神事に含めるのなら割りと働いている事になる。

大宴会などは異変解決後に行うし、毎日妖怪の誰かが博麗靈夢の食事、というか俺の料理を食べに来るのだが、それを神事と言つていのだらうか？

頻度が高いのが亡靈である西行寺幽々子なので、神事のお祓いに当たる仕事だといえば言い訳になるのだろう。食うだけ食つて帰るし。

「え？ あの靈夢が？ そんなバカな？！」

パチュリーが驚愕している。そんなに驚かなくとも。いや、駄目巫女の噂は既に殆どの妖怪や能力持ちの者に伝わりきつている。

俺は何人にも同じような話をしたが信じられないという顔をする奴らばかりだ。

敵は多いぞ、靈夢よ。

と、思い出す。紅魔館の図書館に来たのはパチュリーに呼ばれたからである。

この幻想郷の癖のある奴らと話すとどうも脱線する。

「ところでなんで俺を呼びつけた？」

「え？ ああ、貴方の能力が必要だからよ」

「そうだぜ。これから、魔法研究というなの実験をやるからな。ツムグの【力を分け与える程度の能力】があると助かるんだぜ？」

要はタンクになれということか。

はいはい、どうせ、俺には戦う能力がないですよ。なにせ、能力が力の供給だ。魔法タンクとか、靈力タンクとか呼ばれてますよ！ こいつらには内緒だが、守矢の神社の奴らに執拗に付け狙われているんだぞ。

諏訪子と神奈子にも力を、神力を与えられるとバレてしまつて いるからな。

二人とも全裸耐性が付いており、厄介だ。

東風谷早苗には耐性は付いておらず、久々に初々しい反応を見れた。幻想郷において全裸ネタが通じる人物は少ない。

俺の心のオアシス！ 東風谷早苗！

靈夢然り、魔理沙、パチュリーに全裸ネタをしたことがある。股間の部分は魔力と靈力でぼかしの入れた状態だったが、三人とも冷めた反応であつた。

靈夢は

『で？ 昼食なに？』

だつたし、パチュリーは

『ああ、魔力と靈力の複合技術ね？ 全く無駄な技術ね』

と分析するし。

魔理沙は

『？ 死ねよ？』

だった。

意外にも、風見幽香が乙女だった。
あの時の恥らう顔とマスタースパークの威力は忘れる事はないだらう。

半死の全裸状態の俺を拾つて博麗神社まで届けてくれた射命丸文には文々。新聞購読という行為で現在進行形でお礼を返している。

適当に魔力供給して、俺には理解のできない魔法実験を行い満足気に入一人して俺に微笑んだ。それをお礼と受け取り帰宅することにした。

魔理沙は泥棒稼業から足を洗つたらしい。

一時期、俺が紅魔館でレミリア・スカーレットの妹、フランドール・スカーレットの面倒を見るというバイトをしていた時期にパチュリーに頼まれて魔理沙を挾撃した。

その後、話し合いの結果、紅魔館図書館でパチュリーと魔法を研究、技術協力したほうが、効率よくね？ということで落ち着いた。パチュリーの愉悦した笑みは触れてはいけないと思つた。

フランドール・スカーレットに対しては文々、というか、狂つていたので常識力とか知力とか認識力とかコミュ力などをバランスよく供給することにより、”普通”を学習させていたのが功を奏して今では姉妹揃つて時たま出かけるまでになつていて。

十六夜咲夜はこの事に関して、

『私の萌え成分が増えたことに感謝します』

など戯言を述べていたので、常識力を供給しておいた。
もちろん、変化などなかつた。ロリコンであり、変態紳士であつて
それが彼女の常識なんだろう。

紅美鈴の乳とパンツを見に用事もないのに度々紅魔館に訪れる俺も
どこか常識というものが欠けているのだろうか？
いや、紅美鈴が居眠りの最中に服を多少ズラしたりめくつたりする
程度では起きないのが悪いのだ。

最中に目覚められるとお話と書つ名の肉体言語を用いてくるのでそ
の時は逃げるに限る。

俺の奇襲が何度か会つた後、彼女はついに居眠りをしなくなつてしまつた。

そうではない。俺の発する気を覚えて、俺の気が近づいた時のみ起
きるようになつたのだ。

『来ましたねー？私、寝てませんよ？ええ、貴方の気は覚えました
からね』

俺だけに反応していっては駄目だと思つ。

『あら？ もう帰るの？』

レミリア・スカーレットだ。

毎回思つが、500年以上生きているとは思えない。
美少女であるが、『私、レミリア・スカーレット。小学5年生』と
言つてもまるで違和感がないと思つ。

実際、その位の年齢に見えるし、10歳と言われても信じるだろ？。初めて会った時のカリスマ性はどこかに行ってしまったようだ。レミリアにも全裸ネタは通じなかつたな。

初対面で全裸ネタやつたのに

『ふつ』

と微笑を浮かべて弾幕撃つてきたつ。

「夕食を作らないとウチの駄目巫女が怒るからな」

「まだ、靈夢んとこにいるのね。父親？ というのは失礼ね、面倒見のいいお兄さんと言つた所かしら。お兄さんと言えば、フランがお兄ちゃんが欲しいと言つていたわね。そうね。貴方、フランの兄ね。あら？ そうなると私の兄にもなるのかしら？ それとも弟かしらね？ 精夢達と年も近いし、やはり弟ね」

また、勝手に話を進めて決定しやがる。

「フランも確実に俺より年上だが？」

「いいのよ。フランが兄と思うなら兄で」

妹が全てに優先されるルールらしい。

「それより、他人行儀な喋り方はよしなさい。私達は兄妹なのよ？」

「兄妹は決定なんだな？！」

スカーレット姉妹は家族愛に餓えているのだろう。

友達は最近増えているみたいだが、家族に見せる素の自分というものを模索していると予測。

咲夜は姉と振舞つているが、まだまだ、足りないのであらう。

甘えたい年頃といつには随分な年数を積み重ねているが、容姿的には親に甘えている年頃だ。

「はあ、好きにしる。明日、博麗神社に遊びに来るといい」

「そうね、フランと私、咲夜とパチュと美鈴で行くわ。またね。お兄さま？」

カリスマを氣取つてゐるなあ。

抱つこしてお別れの挨拶をして紅魔館を出た。

「お帰りですねー？ では！」

「おつ、じゃあの」

美鈴は俺を客として扱わないので氣軽でいい。

門から数歩の所で飛んで帰つた。

第一章 境界線内の幻想達（後書き）

東方MMD射命丸 文の白玉楼突撃取材など見たら書きたくなつて書きました。

第一章 食事場のジャイアーズム（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第一章 食事場のジャイアーズム

伊吹萃香がいた。

博麗神社、靈夢の自室に当たる部屋に勝手に入り込んで既にアルコールを飲んでいた。

靈夢はこの時間夕食の材料を人里に買いに行っているはずである。よつて、今、この瞬間、この場合、靈夢の部屋にいるということは不法侵入したことだ。

「おう、摘みは？」

「ねえよ」

「え、摘みい、摘みい！」

ガシガシと腕を左右に振られる。

力を加減されているが、こちらが摘みを出すというまでは絶対に離さない気だ。

この美少女もまた、妖怪である。

怪力の持ち主で、俺の腕を握り潰す事くらい簡単にやつてのける。腕を握り潰してしまつたら摘みが作れないから握り潰さないのか、それとも実力者として認められているのか。

まあ、前者だ。

しうがねえなあ、と前置きし、

「干し柿と漬物で我慢しろよ？ 夕食は食つていいくのか？」

「わーい。食つ」

アルコールの入った瓢箪^{ひょうたん}と頭に生えている一本の角がなければ子供に見えるだろうな。

餌付けされた鬼は手間が掛かる。

しかし、萃香には博麗神社の地酒、”博麗酒”の元になる酒虫のエキスを分けてもらつた恩がある。

エキスを塗つた瓢箪から創りだされる酒を100倍ほど薄めることで人間でも飲めるアルコール度数になっている。

ただの水から酒ができるので儲かる。

何せ何年も寝かした酒より博麗酒の方が、うまいし安いのだ。

萃香は薄めるなんてトンデモナイなど言つていたが鬼と人間ではアルコール耐性が違う。

「ふおういへば……、んぐ、ふはあ。そういえば、守矢神社んとこの早苗がフラつと口に来てツムグさんいませんか？ って聞かれたららいませんよつて答えたら帰つていつたぞ？ アレは何だつたんだろうなあ？」

「なあに、気にするな。ダダの常識に囚われていない痛い少女だ」

ついに本陣まで侵入してきたか！ 信仰の代行者め！

靈夢不在の隙を狙つていたのか、天然で現れて奇跡的に靈夢が不在だつたのかわからないが、前者なら行動パターンをどこかで監視していることになり、後者なら能力だ。

信仰の代行者。

守矢神社の住人で、現人神だ。

奇跡を起こす程度の能力の持ち主である。

自信に満ち溢れた行動力と天然が売り。なお、オパイはボイン。

「なんだあ？ その憐れみの目は？」

「これが持たざる者か……」

薄いな。

靈夢は慎ましやかに並。

メイド長も並。

PAD疑惑は俺が命を賭けた乳揉で解決した。

あの時は、うん。レミリアに救われたが、大きな代償を払つたな。紅魔館の掃除だつたり、メイド長に長期休暇を与える代わりに俺が代行してメイドの仕事をした。

その時に戦利品として各自の下着を手に入れたが、香霖堂を経て闇市場で高値がついた。

森近霖之助が本物であると鑑定書までつけて売りさばき、売上の7割ほど持つていかれた。

紅魔館の七不思議の一つ”消える下着事件”の犯人は主犯、俺。共犯、霖之助だ。

事件は迷宮入りしたが、もう一度と同じことがないよつに、厳重な防壁を作られた。

そんな事を思い出しながら萃香と適当に話をしていたら、家の主が帰ってきた。

「あれ？ 萃香も来てたんだ」

博麗靈夢の横には、四季のフラワーマスターの一一つ名を持つ人物。風見幽香がいた。

彼女は伊吹萃香と同じく気まぐれで博麗神社に遊びに来る。靈夢とお茶を飲んでいるのを見かける事が多い。

お茶会のようなものである。お茶会のある日は必ず夕飯まで一緒に食べて、宿泊していくのだ。

何故か、靈夢と幽香は一緒に風呂まで入るが理由は聞かない。同性同士なのだから別に問題ないのである。

萃香と幽香。似た名前であり、お互に顔見知りになり、今では仲も良い。妖怪同士何か通じるものがあるのだろう。

幽香は萃香を妹のように可愛がる節がある。萃香も別に嫌がりはせず、されるがままだ。

実の所、昔、二人はガチバトルしたことがあるらしい。

その後、しばらくお互いに不干渉だったが、靈夢が現れ、一人共、靈夢に倒された。

そして、博麗神社に再戦として乗り込んできた時に萃香と幽香が鉢合わせになり、その時に色々なやり取りがあり、今に至る。風見幽香には痛い目に合わされたことがある。

一度目は初対面で全裸で遭遇した時だ。

あの時俺は幻想郷を隅々まで冒険するという生活をしており、大体の妖怪には全裸で対応していた。

当時の服は俺の意思でページ可能な特別な服で一瞬にして全裸になるという機能が付いていた。

しかし、幽香にソレを見せた際に俺ごと、マスタースパークで吹き飛ばされてしまった。

俺は助かつたが、服はボロボロになつた状態で河城にとりに回収されてしまい、きゅうり30本で修理、追加きゅうり100本で譲つて貰い、今は筆笥たんすの中に仕舞つてある。

二度目は靈夢に男がいるという噂を聞きつけた幽香が博麗神社に行き成り現れた時だ。

俺が博麗神社に居候を始めて二ヶ月位の頃だったはずだ。

靈夢と協力して幽香を戦闘不能にまで追い込み何とか理解を得た。

『力を分け与える程度の能力ねえ。それで？ 靈夢に協力して異変を解決？ それが続いて気付いたらお互いが意識し始めて、男女の仲に……！』

再熱した幽香だつた。

が、俺がいる限り、靈夢には無限に近い靈力が供給され続ける。再度、落ち着かせる為に戦いついには、

『つ……。厄介ね。貴方の能力。疲れたわ』

疲労したとは思えなかつたが、戦闘後の恒例？ の宴会で誤解は解けた。

どうも、俺の料理が気に入つたらしい。

その後も、花の世話を手伝つたりして幽香さんのご機嫌伺いをした。

『なるほどねえ。ツムグの能力で花に”生命力”や、病気への”抵抗力”を分け与えることで花を管理できるわけね』

フラワーマスターの名の通り。花の世話が好評であった。

花の鑑賞も好きだが、幽香のオパイも好きである。

サイズ的に上位存在であり、美人であるから見応えは抜群だ。

俺の視線に気付いて、

『？ 別に減るものでは無いからいいけど。ほどほどにしどきなさいよ？』

許可が出たと受け取り、鑑賞は現在も継続中である。

夕食後、四人で茶を啜り、月を見ながらの晩酌はなかなかオツなものである。

美女一人。美少女二人。

幻想郷の女性は美人が多い。

能力持ちの人間、妖怪は全員が美人、美女、可愛い、萌えるの成分を含んでいる。

改めて、思う。美女との晩酌は時間の経過が早い。

数時間前に、靈夢は萃香の酒を飲まされて死んだように眠っている。萃香もからかう相手がいなくなつたのと腹が膨れたので寝ると言つて靈夢と共に一緒の布団で寝てしまつた。

日付が変わらうとする時間だが、幽香と俺は日本酒を飲んでいた。

「ねえ？」

「ん？」

風見幽香は思つ。

この人間は変わつてゐる。

戦闘能力はその辺の人間と同じだ。

能力でなんとかしているらしく、多少、強めに殴つても平氣であるが、スペルカードを使つた所を見たことがなかつた。妖怪に相対する時、人間はスペルカードを使用する。しかし、ツムグは妖怪に對してスペルカードを使つたことがあるという話は聞かない。

ブン屋曰く、

『貴女が原因でもありますね。彼に危害を『え』ると博麗の巫女が報復に來ると、そういう噂です』

卑怯だと若干思うが、アレは負けたのではなく、面倒臭くなつた。戦い続けるのも悪くないが、こちらは疲労していくのに対し相手は疲労しない。

更に、消費するはずの力が供給され、永遠に戦えるのだ。それが理

解できたから面倒臭くなつた。

ツムグに焦点を置いて攻めれば恐らく勝てるだらう。ソレをしなかつたのは、要になるツムグに対して靈夢が何もしていなければいいと思つたからだ。

後日確かめたらやはり、防護符を持つていた。

ツムグを攻めれば靈夢に隙を与えることになり、こちらが負けてしまつ。

靈夢を倒すとなるとコレまた供給があるため、長期戦の末こちらが負けてしまう。

卑怯ね。

一定の能力持ちと組むことで幻想郷で強さのイニシアチブを握れるはずだ。

それをツムグが望まないとしても傀儡として操つてしまえば、無限供給される力を手に入れる事ができるというわけだ。

幻想郷を支配しようと考える妖怪は殆どいないだらうが、疑問に思つたことがあつた。

「幻想郷で勝てない相手はいるの？」

もちろん、ツムグだけなら勝てない相手の方が多い。

「いるよ」

酒が回つているのか随分素直に答えてくれた。

「誰？」

「八雲紫」

なるほど、と思う。彼女は確かに強いのだらう。

萃香の友人である。知り合いであるが戦つたことはない。

相当古い大妖怪である。

「実際、境界を操る程度の能力は何でも有りだよ。力を分け与えるには対象を認識して意図的に分け与えているわけなんだけど、認識の境界をめちゃくちゃにされるか、力を分け与えているラインの境界をいじられるか、俺自身の存在の境界を操られたら終わりだ」

それに、

「生と死の境界を操られたら一瞬で死んじゃうよ」

酒を少し飲み、喉を潤して、

「それを誰にもしないのは紫が幻想郷を愛しているからだと思つ。気に入らないからと黙りこぼしてしまつたら全てを受け入れる幻想郷が嘘になる。それは八雲紫のしてきたことを否定してしまつ。と考えているのか、ただ面倒臭がりなのか。

掴みどころがないが、それも紫の良い所だと思う。胡散臭い口調の時は照れ隠しだつたり、裏にある意図を読ませないための行為だろうね

「なるほどねえ」

感心する。

なかなか思慮が深いらしい。
やはり、手に入れよう。

「ツムグ、私のモノになりなさい」

「」

驚いた顔も面白い。

正直に思えば、ツムグを気に入っている。

私の【花を操る程度の能力】で秘密にしていることがある。

それは、花や植物の声が聞けることだ。

花達は一いちから話かけるとそれに答えるように声を発するのだ。しかし、花から自発的に声を発することがあった。

『この人、暖かい』

『お礼、助けてくれた』

『命大事にする』

普通の人なら氣にも止めない道端の弱つている花にツムグが能力を使い元気にして、森で食べれる物を採取している時には多くの動植物に能力で力を分け与えているそうだ。

優しいと言つたか、馬鹿だ。

だからこそ、氣に入ったのだろう。

靈夢も可愛いが、コイツもなかなか良い所が多い。

手に入れてマイナス面がない。

それどころか、手に入れてしまえば、靈夢がおまけで付いてくるだろ。

退屈することが無くなりそうだ。

『酔つてるな』

『あなたにね』

靈夢と同じ、たまには勘というモノに身を任せてみようと思つ。

私の勘はツムグを手に入れれば面白い事になると告げている。

ツムグに身を寄せると、彼を、

「そんなに飲んだか？ いつもならこれ位で酔つ奴じやないだろ」

「言つたでしょ？ ツムグは私のモノなのよ？ わかる？ 貴方の

モノは私のモノ。私のモノは私のモノ

押し倒した。両腕の手首を掴み、馬乗り状態になる。ツムグは驚いた顔をしている。遅れて抵抗してきたが、力で私に敵つはずもなく、

「悪酔いだな……」

「どうかしらね？ 本当は解つてん癖に」

首筋から舌で擦るように舐め上げて、頬を伝い、唇を奪い、舌を無理やりねじ込む事で口内を蹂躪した。

内心、強姦しているが立場が逆だわね。と思つ。一分程蹂躪を楽しむと、股に確かに熱さを感じた。

男性が気持ちよくなると硬くなるモノだ。

「んつ、やめつ」

辞めるどころか、もっと激しく舌を動かした。

彼の舌を吸い上げて唇で激しく扱く。

扱きながら舌も使う。

さらに、股にある熱い硬いものを擦るように腰を動かした。この行為でますます彼の抵抗が強くなつたが、両腕はがつちり固定してある。

また馬乗りの要領で腿で彼の腰辺りを挟みバランスよく乗る。

彼の両腕を私は左手一つ抑えつけることにして、開いた右手で彼の服を破り、脱がす。

「

何か言いたげだが舌を吸い上げられており、言葉を発することがで

きない。

一方で、私も下着をずらす。

服を脱げないが、月の見える廊下だったので、彼の表情がよく見え
た。

レイープは犯罪です。

配点：（警告）

第一章 食事場のジャイアーズム（後書き）

作業BGMは東方JAZZ

第三章 幻想の協力者（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

満月の夜。

神社の長廊下に男女はいる。

男は寝転がつており、その上に跨る格好で女はいた。廊下を軋ませる程の上下運動が繰り返されている。

男女の表情は対照的であった。

男は泣いているような顔で、女は狂気を含んだような笑顔である。女が身体を震わせ、痙攣する。それに合わせるように男も身体を震わせ痙攣した。

幾度も痙攣を繰り返し、果てる。

果ててはまた、女が動き出し、廊下を軋ませる。

それを何回も続け、ついには男女の格好が逆転する。

水気を含む音が響き、また、果てる。

お互いに抱き合い、座つた状態で再度動く。

女の足が男の腰に纏わり付く様に絡まり、男の足の上に座つた女は満足気に唇を吸う。

着衣していたはずのものはなく、お互いに裸である。

抱き合い、座つた状態で互いに痙攣し合う。

身体の一部が繫がつたまま、状態を変え、女は犬のように俯せになり、男は激しく腰をぶつける。

今度は水と肉体がぶつかる音が響く。

あらゆる状態でお互いに快楽と、疲れに溺れ最後にはやはり、女が男に跨り、果てることになった。

異変に気付いたのは博麗靈夢であった。

いつもなら朝ご飯の匂いで起きるはずが、異臭で起きた。アルコール臭だ。

昨晩、いつの間にか寝てしまつたと曖昧な記憶を辿る。布団には酒臭い萃香が寝息を立てていた。

なるほど、原因はコイツか。

しかし、ツムグも寝坊か、珍しいこともあるものだ。日は昇つており、昼前位だろうか。

布団から起き上がり、顔を洗う。

服を着替えて水を飲む。

ふと、廊下に出た所で、完全に覚醒した。

「何？ これ……」

ツムグの服らしきものがボロボロになつて放置されていた。廊下には服以外のものではなく、清掃されたような痕跡と花の臭いが漂つていた。

幽香も来ていたはずだが、いつの間にか帰つたのだろう。廊下の清掃は醉つて何かこぼしたのだ。

「……。な、訳ないか」

「んー？ どうかしたのかー？」

起きたばかりの萃香だ。

博麗神社に感じる気配は私と萃香以外には無い。

本来いる筈のツムグの気配が無い。

幽香の気配も無い。

これらから導かれる答えは……。

「萃香、事件よ！」

【号外！ 博麗神社の居候、ツムグ氏拐われる？！】

文々。新聞の見出しだある。

昨晩ツムグ氏が何者かによつて拐われた。

記者こと、射命丸文が昼、博麗神社に訪れた際の、博麗靈夢氏は狼狽していた。（以下、靈夢氏）

詳しく述べ聞くと、靈夢氏が目を覚ますとツムグ氏がいなくなつていたようだ。

博麗神社の陰の支配者と噂のツムグ氏を誘拐した人物とは一体何者であろうか？

靈夢氏は語る。

昨晩、夕食時には、四人の人物がいた。

一人は靈夢氏、残りは伊吹萃香氏、風見幽香氏、ツムグ氏である。

その内、風見幽香氏とツムグ氏がいなくなつた。

また、ツムグ氏の衣服と思われるものがあり、その衣服はボロボロに破かれていた。

出血などの痕跡はないが、最後にツムグ氏がいたであろう場所には証拠隠滅の痕跡があり、事件性が高いと思われる。

なお記者は居なくなつた風見幽香氏を追うべく風見幽香氏自宅へと向かう。

今後の文々。新聞の真相解明を期待して欲しい。

次号！ 特派員、射命丸文は事件の真相に迫る！

射命丸文は喜んでいた。

無論、事件にあった人物に対してもなく、自分の新聞が好評であったからだ。

紅魔館、永遠亭、香霖堂などで非常に好評であった。
人里にも配つており、上白沢慧音も驚いた様子であった。
まさか、守矢神社が購読してくれるとは思わなかつた。

何気に、すごい人脈ですねー。

さて、風見幽香氏の自宅に付いたのだが、誰もいなかつた。

「どうじつことでしょー?」

とりあえず、写真を撮り、新聞のネタ帳にメモを書き込む。
自宅は昨日から空いている事になる。

帰ってきた痕跡がなく、風見幽香が犯人だとするなら、計画性の高い仕組まれた誘拐かと思ったのだが、突発的に思いついたようだ。
そうなると、ツムグの安否が心配になる。

計画的な誘拐なら命に別状はないだろう。何かの犯行声明なり、要求があるはずだ。

しかし、突発的な出来事だと、最悪、ツムグは食べられているかもしない。

妖怪の本能に従えばそなう。

未だに風見幽香からの要求も反応もない。
そこから考えられることは、

- ・ツムグを食べてしまい、まずいと思い、逃げた。
- ・ツムグを食べるため誘拐されたことにしている。

- ・まさかの、駆け落ち。
- ・計画的な犯行を突発的な犯行に見せている。

3つ目はないな。恋愛感情があるとは思えない。少なくともツムグにはないだろう。

可能性が高いのは一つ目。

2つ目は風見幽香自身がいないし、別妖怪が誘拐したと言つ発言がない。

4つ目だと事件解決させようとする意図が見える。

となると、裏では妖怪の賢者辺りが動いている可能性がある。

巫女に試練を「える名目で風見幽香と協力しているかも知れない。

「なんにせよ。情報が足りませんね」

少なくとも計画性のある犯行なら、自宅の荷物が減っていたり、留守にするための準備があるはずだ。

しかし、それらがない。

つまり、急ぎで情報を入手する必要がある。

犯行現場であろう、博麗神社に再度向かう。

「で？ どうしたいの？」

「匿いなさい。理由はそつね。靈夢に試練とでも言えれば良いわ

風見幽香にとつて僕倅だったのは、ツムグの人脈の広さであった。行為の後、朝日が見え始めた時にツムグは気を失うように寝た。そのまま、睡眠性の臭いを出す花を操り、寝かし続けることにした。

事後の処理として廊下を清掃し、自分は服を着て、証拠がある程度残しつつ、ツムグを抱え博麗神社を撤退した。

自宅で靈夢を迎えるのも良いかと思つて、矢先、八雲藍に出会つた。

「あの、その全裸はツムグさんですよね？」
「ええ」

口が弓が曲がる様に釣り上がるのを自覚しながら八雲藍を齧して、八雲紫宅に招待させた。

八雲宅に付いた時は片手に八雲藍、もつ一方にツムグを抱えた状態だつた。

それを見て驚いた橙が八雲紫を叩き起こし、交渉になつた。

「藍を人質に交渉ねえ。で？ どうしたいの？」

「匿いなさい。理由はそつね。靈夢に試練とでも言えれば良いわ」

「ううう、藍様あ」

「ちえええん！」

うるさいわね。

まあ、人質になるとは思つていなide。

ツムグを起こして交渉役にしようかしら？

「遅からず、持つて2日だけど？」

「それだけあれば十分よ」

ふーん。といつ言葉とこひらを值踏みするよつた視線であったが、敵意はなかつた。

「童貞は奪われたみたいね。条件はツムグをこひらも、貸し”な
さい」

ツムグも初めてだつたのか。

貸す、か。できれば2田の内に墮落させて虜にされ予定なのだが、
ハ雲紫の能力があれば、色々と楽できそうだ。
損得勘定と効率面で見ればお釣りが来るか。

「その位は承認するわ。その代わり 」

紫様と風見幽香の顔はまさに妖怪じみていた。
取引内容はツムグさんの身体を弄ぶことらしい。

「いい機会だから、藍と橙も経験しどく?」

え?

「あら? 藍つて経験済みじやない? 橙も混ぜるなんて、貴女、
いい趣味してるとわ」

「藍は経験は無いわよ? 化かして、上手く避けていたもの。橙は、
まあおまけみたいなものよ」

決定でなかつたものが決定になつてゐる?!

紫様だつて経験無いはずです。

「ほひ」

と、風見幽香が全裸の、いつもなら靈がかかつてゐるモノが無く、

丸見えな状態のツムグを眼の前に提示された。

「興味津々ね」

決まりね、と言つた口調であつた。

緊急対策本部は博麗神社になつた。

そこには、博麗靈夢、霧雨魔理沙と射命丸文がいた。

「あや？ 紅魔館の人達は既に動いていと？」

「お前が居なくなつて直ぐに動いたぜ？」

「人里は慧音、永遠亭周辺はてゐとうどんげが動いてるわ。萃香は地下に向かつたわ。早苗達も動いてるみたいよ。ナズーリンがいればよかつたんだけどねえ」

靈夢は思つた以上にツムグの人脈があつた事に驚いていた。

犯人であろう、幽香の居所は掴めていない。

紫辺りが知つてそうだが、連絡しようにも連絡方法がなかつた。思えば長い付き合いのはずなのだが、八雲紫宅の場所を知らない。

「ま、ツムグだつて身を守る位の事はできるわ」

「そう言つて、握り拳作つてするのが可愛らしいですねー」

「アソッ、スペカ下手だからな。スペカ下手つて斬新だぜ？ これ、流行らそつかな。お前、スペカ下手だな。みたいに」

そこは、頷いておこづ。

スペルカード作るのが下手くそで、結局、自作のは一枚しか持つて

ない。

スペルカードルールができてからのツムグの立ち位置はタンクだからなあ。

「それにしても、幽香は何を考えているのかしら?」

「あやや? 犯人は幽香さんで決定ですか?」

「勘よ」

「勘ね。話を聞く限り間違いじゃなさそうだぜ。まず、私は香霖堂で霖之助を締め上げてくるぜ!」

私はどこへ向かうべきか。

魔理沙は飛んでいいが、私の勘では霖之助はハズレだろ?。

「で? 文、何か思う所があるんじゃないの?」

何故か取材後、新聞を最速で配つてまたココに帰つてきたといつことは何かつかんだのだろう。

「あやー。あまり、言いたくないのですが、ツムグは食べられたのでは?」

「そんなわけないじゃない!」

珍しく、大声を出してしまつ。

それに対して文は驚いた様子だった。

しかし、ふうと呼吸をし、

「いや、可能性の問題ですよ。突発的に食べてしまつて、まずいと思つて隠れている。と私は考へてしまいまして。それで、現場である神社をもう一度調べて新しい発見が無いかと思いはせ参じたわけとして、「

と言い、現場付近を隈なく調べ始めた。
それに協力する形で、私も廊下を中心に調べることにした。

この位のH口なら大丈夫だと思つ

視点：作者

第三章 幻想の協力者（後書き）

3日を2日に変更

第四章 強者の暗躍者（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第四章 強者の暗躍者

博麗神社に一人の少女がいる。

二人は真剣な眼差しである。

神社の廊下、部屋、境内を隈なく、何物も見逃さないという眼差しで観察している。

射命丸文と呼ばれている少女があることに気付く。

足跡だ。

地面の僅かな凹みから、誰がどの足跡か割り出した。

風見幽香のものと思われる足跡に全てマーキングを行い、足跡を辿る。

すると、境内を横切り、石階段の辺りで消えていた。

この事から風見幽香はツムグを抱きかかえ、石階段へ向かったという事実を導き出したのだ。

この時、射命丸文は内心である種の感動をしていた。

博麗靈夢の事である。

一生懸命取り組むことや努力を嫌っていたはずの博麗靈夢が一生懸命、手掛けりを探していたのだ。

ツムグの影響だろうか？

それに、幻想郷では、自分の周りさえ良ければそれで良いという考え方をもつ妖怪が多かつたはずである。

それが、ツムグの事を気にかけているのだ。

彼とは当初は頻繁に会いに来ていたが、取材することもなくなり、いつも通り、ネタに困った時に会いに来る程度であった。

取材に普通に答えてくれて、外の世界の事も幾つも教えて貰った。それに、力を分け与えている能力で、一度力を供給してもらつた事

がある。

その事について、秘密にしていることがあった。

それは、妖力供給は性的快感に近いものがあったのだ。

妖怪によつては感じ方が違うと思うが、天狗に関してはその感覺である。

風見幽香も同じ感覺で、それを理由に誘拐してしまつたのではない
か？

と射命丸文は考えたがあまりにも自分本来であり、まるで、自分が
そうしたかつたと思てしまい、考えるのをやめたのであつた。

「(+)から、こう歩いて、(+)で終了です。あとは階段を降りたの
か、飛んでいったのか分かりませんね」

廊下付近から境内を通り、まつすぐ階段に向かう足跡。
靈夢さんは考え込んでいる。

私は取り敢えず、と前置きして、

「階段の降りた先を見てきますね」

「ええ、頼むわ。文」

はい、と言い。階段の最下に到着した。

「ん？ これは、風見さんの足跡ですね。それと、これは？」

金色の毛玉が幾つかある。
ハ雲藍の尻尾の抜け毛だ。

それも大量にあつた。

まるで、何者かに巻られたような抜け具合だった。

写真を撮り、毛玉を入手。

靈夢の元へ戻る。

「やっぱり、鍵はハ雲紫ね。藍の方は、偶然遭遇した幽香に脅され
たって所ね。共犯かしら？」

「いえ、それなら斬られたようなモモは残りませんよ。それに、ス
キマで拐うでしょっし」

ホッと安心する。

少なくともツムグは生きている。

ハ雲紫は無理やり関わりを持たされたと言う所でしょう。

やはり風見さんの突発的な単独犯行でしたね。

偶然か、たまたま犯行後にハ雲藍さんが出くわしてしまい、巻き込
まれたと言うのが流れでしょうね。

早速記事にして新聞を作らねば。

なんと、号外を出したのがお昼過ぎで、今はまだ昼と夕方の中間だ。
最短記録で新聞発行ですね。

「では、私は新聞を作りに一度帰りますね。たぶん今後の事はハ雲
紫さん辺りから何かあるでしょう」

「文、ありがとうね」

飛び去る前、背中越しに感謝を述べられた。

お礼を言われた方が恥ずかしい思いをするほどの笑顔を去り際、振
り返る事で視界に入った。

ほんと、可愛いですね。

「さー、正直にツムグの居場所を答へな！ 今なら吹き飛ばすだけ
で許してやるぜ？」

「ちよ、ちよっと待て。俺も新聞を読むまで知らなかつたし、そもそも新聞の内容は本当なのか？」

「白々しいぜ。言訳はあの世で聞く」

香霖堂に激音が響いた。

「妬ましい事にアイツと風見は通つてないわ」

「あつそ、じや」

「ちよっと！」

「伊吹萃香はクールに去るぜ！」

パルパルパル……。

「迷いの森には入つてないね」

「そう、てゐ、ご苦労様。はい、人参

「わーい」

「師匠、どうなんでしょう？」

因幡てゐ、鈴仙・優曇華院・イナバは八意永琳のため息を聞いた。

「まあ、博麗の娘がなんとかするでしょ」

ツムグはある意味境地に立たされていた。

声を出そうにも猿轡さるくつわで口は封じられており、更に目隠しがされてい

る。

その上で、両手を縛られていた。肘は曲がるが、肘の辺りまで何かで縛られている拘束感がある。

足は自由に動くが、今、仰向けに寝かされている状態だ。体内時間では今は昼過ぎ位だろうか。

そもそも、昨日の夜、幽香に唇を奪われた後の記憶が曖昧だ。

夢心地で幽香と肉体関係を持つた夢を見ていたと思いたい。

しかし、身体に感じる疲労感がそれが真実であつたと実感させる。では、何故、捕まっているのだろうと思つ。

肉体関係を持つたことは、過ぎ去ってしまった過去だ。酔った勢い、犬に噛まれたと思う。

逆レイアップだよな。夢の内容は。

今の状況はあまり良くない。

誰かと組まないと力を発揮できないのは自覚している。

それに、切り札となるスペルカードも取り上げられているみたいだ。巧妙に下着の内ポケットに忍ばせてあるのだが、たぶん幽香にアレされた時に脱がされたとすると、神社に置きっぱなしだろう。

突如、人の気配がした。

「起きたわね？」

この声は幽香だ。

動けないので頷く。

「ま、不便だから、口のは取るけど、大人しくしていないと、そうね。犯すわよ？」

それは下卑た男がか弱い女の子にする脅迫だと思つ。口の拘束が解かれた。

「趣味か？」

「ふふ、そうね。趣味と言えば趣味ね。それにしても、聞かないのね？」

現状だつたり、幽香の目的とかの事だらう。下手に刺激して犯されても困る。

「まあ、なんとなくね。取り敢えず、口の次は目か手の方を解いてくれると助かるぞ?」

「却下ね、水と」飯を上げるわ。ええ、もむかん全て食べさせてあげるから」

ありがたくて涙がでるね！

拘束されているということは、逃げられたら困る状況にあるということだ。

逆レイープされた上に、拘束か。趣味だと答えたから。そういう事をするのだろうか。

靈夢の事だからそろそろ事態に気付いて動き始めているだらう。さて、脱出は無理だ。相手が幽香で、味方がいない。

拘束具も割りとマジな逸品のようだ。

力を込めたがビクリともしない。能力では拘束力を強めるだけだしじせめて、自分自身に力を分け与えることができれば抜け出せるのだが、できぬものはしじうが無い。

「つまらないわ。考え方しながら私の手作りの料理を食べるなんて……」

知るか！

と思ひが、口には出せないでおく。

腹は膨れた。

「いや、説明なしに現状を推察していた。飯はうまかったよ」

突如、視界が明るくなつた。

何きつかけで許されたのかと思えば、

「ううう、恥ずかしいですよ」。紫様」

「藍さまああ、私もです」

「まだまだねえ」

全裸の八雲紫、八雲藍、橙がいた。
もちろん、幽香も全裸である。

「何？俺の全裸ネタが流行つてゐるの？パクリ？」
「私達を見てその反応ができる男は貴方位ね。ま、時間はあるし、
ね？」

紫の発言に頷く残りの三人であった。
それに対して引き攣る顔をした。

【号外！ 博麗神社のツムグ氏を風見幽香が誘拐？！ 真犯人は八
雲紫か？！】

文々。新聞の見出しである。

前回、風見幽香氏に向かつと言つた記者」と、射命丸文は早速、自
宅へ向かつた。

自宅には誰もおらず、ツムグ氏の安否を確認できなかつた。

しかし、博麗神社に証拠ありと気付いた記者は再び博麗神社に向かう。

そこで、重大な手掛かりを掴む。八雲紫氏の式である、八雲藍氏の毛を見つけたのだ。

この動かざる物的証拠により、誘拐犯の真犯人は八雲紫氏だと博麗靈夢氏は断言した。

この事件関わる、風見幽香氏、八雲紫氏、八雲藍氏に組織的な誘拐犯の疑惑が掛けられた。

次号！ 特派員、射命丸文は事件の犯罪組織に立ち向かう？！

夕方の博麗神社に集まる陰がある。

紅魔館メンバー、スカーレット姉妹、メイド長、十六夜咲夜、門番、紅美鈴。

鬼の幼女。伊吹萃香。

白黒魔法使い。霧雨魔理沙。

博麗神社の主、博麗靈夢である。

「久しぶりに、靈夢の手料理ね。ツムグに任せきりで腕が落ちたんじやない？」

「つるさいわよ。レミリア」

「お嬢様、仕方のないことです」

「お姉さま、普通だよ？」

「そうね。普通よ。靈夢」

「相変わらず、妹ルールだぜ……」

紅美鈴は珍しく真剣な顔をしており、その先には焼き魚があつた。
あれ？ 美味しいと思う私がおかしいのかな？

「私は飲めれば問題ない」

マイペースな萃香を横目に、紅美鈴はまあいかと思つた。

それにも、珍しく主要メンバーで外出ですねー。

紅魔館の方はパチュリー様に任せきりでいいのでしょうか？

お嬢様は今夜の夕食を博麗神社すると約束したらしく、律儀にそれを守つたのだが、招いた本人はいなかつた。

私の彼に対する意見としてはセクハラ。全裸。馬鹿である。

人間であり、力も無い。

週に一度、私に武術を習う程度であり、武術の実力も褒められたものではない。

人里の男よりは若干強いだろうが。誘拐犯の風見幽香さんには到底敵わない。

しかし、お嬢様と妹様とで彼を探しに行こうとしたのには驚いた。何せ、日の出でいる時間帯に文々。新聞で知つて直ぐに飛び出そうとしたからだ。

そこは咲夜さんが止めて、二人の代わりに私と咲夜さんで探し回りましたが、結局、夕方前の文々。新聞である程度のことがわかり、博麗神社に赴くことになつたのだ。

「それで？ 霊夢、これからどうするわけ？」

お嬢様がワインを靈夢さんに傾けて問う。

「別に？ その内、紫が来るでしょう。ま、今日は下準備で、明日の昼までに何も動きがなければ八雲宅を探しだすわ」「やう、なら取り返したらその日の夜に私の所に来なさい。もちろん、ツムグを連れてね」「お兄ちゃん連れてきてね」

はて？

いつの間に妹様は彼をお兄ちゃんと呼ぶようになったのだろう？

「善処するけど、後2日位掛かりそうな気がするわ」

「それは？」

「どうこう」という意味を込めて聞いたのだと思つ。

「どうも、変な感じがするのよねえ」

「霊夢はそればっかだぜ。霖之助はマジで何も知らなかつたみたいだし。何気に霖之助も心配してたぜ？」「地下には何もなかつた」

彼の行動範囲は広いみたいだ。

「永遠亭にもいないつて文は言つてたわ。紫の家にいるんですよ」「食べられてなればいいんですけどねー。性的な意味で」「」

アレ？ 私何か変な」と言いました？

「お姉さま、美鈴の言つてる意味つてなに？」
「フランにはまだ早いわ」「そうです、妹様。美鈴は、ちょっと頭が可哀想な娘なのです」

あれれ？

おかしーなー。

妖怪が男を囮うつてそういう意味もあるんじゃありませんでしたつけ？

まー、私はそういう事したこと有りませんからわかりませんけどね。

作者は風見幽香と本みりん
紅美鈴が結構好きである。

配置：（本心）

第四章 強者の暗躍者（後書き）

ヘミコニアのセリフ修正

3田を2田に変更

第五章 幻想の挾撃者（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第五章 幻想の挾撃者

5人の人影がある。

女が4人でそれぞれが美人、美女である。

4人の内3人は持つものである。

1人の持たざる者は羨ましくもあり、何故自分だけ薄いのだろうと考えた。

しかし、繰り広げられる行為を前に自分が女である事を自覚することなる。

薄くとも感じられる。

さらに言えば自身がここまで、乱れるとは考えもしなかつたのだ。
自ら、咥えたり、腰を振つた。また、主人である、女性に愛撫され、
愛撫し、より、乱れた。

男のほうは衰えを知らず、ひたすら4人を相手に貪り尽くす。

誰が何回、果てたか分からず、ひたすら求め合い、時間を忘れた。

八雲紫は考察した。

何故、風見幽香の提案を飲んだのか。
また、何故彼を求めたのか。

風見幽香から漂う、濃厚な行為があつたと知覚できるほどのオスの匂い。そして、以前見た自分の記憶にある風見幽香と比べると、より、美しく、より力強くなつていたように感じた。

妖怪で女である自身がより美しく、強くなりたいという欲求と、そ
ういった行為に興味があつたことが彼を求めた理由なのかもしけな
い。

男と交わるのは初めてであつたが、思つていた以上に、よかつた。

特に、後ろから突かれるのが癖になりそうだ。と。

それにも、幽香のアレは見ていても興奮した。跨り、腰を振り、相手は男なのに、乳を責めたり、唇を蹂躪していった。

その上、相手が果てよつとするタイミングで必ず、行為を止めてお強請り『おねだり』させるのだ。

アレが、『いちめプレイ』といつものなのだろう。

一度、風呂に入り身体を清める。

服を着て、靈夢にじりつやつて試練を『』えるか考える。

理由は沢山ある。

ツムグがいないと自墮落になるし、神事もやらないだらつ。腕は立つが、ツムグなしでの戦闘は最近していないと思つ。ならば、ツムグのいない状態で現在の実力の確認、強敵との対戦で己を自覚してもらおう。

そう決めた。

順序は、藍と橙の相手、幽香の相手といつ所か、靈夢に味方がいる場合、私も動き、分断させよう。

萃香辺りは、全部見通しているかもね。

あの子、猫かぶりだしね。

萃香の事を考え終わるうとした瞬間にそれは発生した。

「あのよー、なぶるるのはいいけど、使い物にならなくしたり、殺した

ら、お前、殺すよ？」

「ふふ、萃香、一体いつから知つてたの？」

姿はどこにもないが、確かに声は聞こえる。

密と疎を操る程度の能力で霧と化してしるのだらつ。

「んー？ 幽香がツムグに襲つた辺りから。一人には私の一部を紛れ込ませてね。なかなか面白いことになつてゐるじゃないか。靈夢には聞かれてないから黙つてゐるけど。私の能力の事、頭から抜けてるね。もう一度言つけど、皿い摘みを作るやつを殺すんじゃないよ？」

その時は解つてゐるな？」

「はいはい、ま、後2日もしたら元に戻るんじゃないかしら？」

「うかー。と聞こえたのを最後に声がしなくなつた。
さて、後、2日持たせるには今日の昼には靈夢の所に行かないと、
たぶん乗り込んでくるわね。
まだまだ、考へることがある。
遅めの朝食を食べて考へるとしよう。

博麗神社に2匹の妖怪がいる。

射命丸文と伊吹萃香だ。

射命丸文は天狗であり、伊吹萃香は鬼である。
鬼と天狗の関係性は鬼が上位存在で、天狗は鬼には逆らえない。
しかし、射命丸文と伊吹萃香の仲は例外と言える。

「狡猾な天狗、どこまで掴んでる？」

「まあ、ツムグさんに八雲紫さんが手を出せない程度には。もちろん生命的な意味で。性的な意味で、どうか？ と聞かれれば確實に手を出しているでしょうね。大妖怪が3人。橙も含まれいますかねー？」
ま、橙もあれでも妖怪ですからね

「そこまで掴んでるならいいよ。靈夢には……」

「内密といつことですね？ 風見幽香さんの口車に八雲紫さんが乗

つたという解釈で正解ですか？」

射命丸文の質問に伊吹萃香が頷く。

「紫は後2日でこの騒動は終わると見てるし、靈夢も同じような事を言つてたからそれまでは大人しくしてな。その後は、わかるよなあ？ なあ？ エロ天狗？」

「ははは、なんのことですかね？ エロ鬼」

二人の口元は弓のようく曲がつてあり、獲物を定めた妖怪の顔であった。

博麗靈夢は自身の感情に戸惑いを覚えていた。

今回の事件は八雲紫がサボリ氣味な自分に活を入れるためのものだと思ひ。

しかし、己の内に嵐のような渦を巻いた感情がある。

いつも隣にいる筈の人物がいない。

ただそれだけの事であるが、歯の間に異物が詰まつているような不快感とその不快感を感じる自分がまるで彼に特別な感情を抱いていると思てしまい、それを否定する自分と肯定する自分に別れ、どちらも自身の感情である。

つまりは、好きか嫌いか。恋人か友人か。愛情か友情か。家族か恋人か。

どれに分類できるのか自分でも分らないまま感情だけが渦巻いていた。

友人と思っていた異性を意識してしまい、顔を合わせたら赤面するであろう思春期の女の子。

たぶんこれが今の博麗靈夢に合つ言葉である。

博麗靈夢が全ての準備を終え、さて、これから殴りこみに行くかといつタイミングで、空間にスキマ現れた。

「はあーい靈夢」

「あら？ 今から殴りこみに行こうとしたのに。残念ね」

胡散臭い八雲紫をまともに相手にする必要はないので、要件を聞くことにした。

「今回の騒動、私への試練？」

「はーい、正解。基本ルールはスペカルールだから。ま、頑張つてね。そうね。最終目的地は風見幽香の自宅よ。そこに辿りつけば、商品があるわ」

つまり、幽香の家にツムグはいるわけね。

それまでの道のりにおそらく敵が待ち構えている。

「1人で行くのが好ましいわ。邪魔者には邪魔者を。ね？」
「わかつたわ。ま、私が誘わなくとも勝手についてくるんだから私の知ったこっちゃないわ」

もともと、居場所さえ分かれば1人で向かうつもりだった。
1人で向かい……。どうするつもりだったのだろうか？

ツムグに怒る？

何故？

そもそも居候であり、出でいく時は出でいく存在だ。
勝手に出ていくなと怒るのか、それとも心配させるなと言つのか。

「ご飯を作るのは誰がやるのよ？」とでも言つのか？

今回は八雲紫と風見幽香がわざとらしく仕組んだものだが、本当に何者かが、ツムグを誘拐したり、食べたりしたら私はどうするのだろうか。

勘の良い子だから、気付いたはずだ。

ま、何を思うかは靈夢の勝手だが、こちらの意図は気付いてくれたはずである。

本来持つ、実力以上のモノが出ればいいのだが。

靈夢の成長は、娘の成長を見るようだなあと思つ。

今回の事件は風見幽香がきつかけだが、それに乘じてよかつた。

釣り上げる為の餌が良かつたようね。

眉が釣り上がり、口が三日月に歪む。

「人の子よ。何を求める、何を想い戦うのか、しかと確かめよ。そして、全ての結末を受け入れなさい」

霧雨魔理沙は相対する。

人間として、空を飛ぶスピードは最速クラスだが、妖怪を含めると最速は射命丸文になる。

その射命丸文が目の前にいる。

博麗靈夢の後を追つたために、八雲紫の謎の発言を盗み聞きしていた。空を飛び、追いつく前に割つて入つて来たのが、

「文あ。邪魔するのか？」

「えーと、やうなります」

彼女であり、どうやら靈夢との合流を妨害しに来たようだ。
しかも、あまりノリ気ではないと言つ口調だった。

「私の役割の9割は今の時点です終わっています。恨まないでください
ね？」

「ハツ！ どうゆうことか説明がいるぜ。 おい！」

スペルカード無しで、射命丸文の風を操る程度の能力で操られた鋭
い風が、服を裂いた。

「大丈夫ですか？ 加減はしますんで、後止めとかはスペルカード
使うので安心して下さいね」

「どうゆつことだつて、あぶねえぜ」

蹴り？！

寸前で回避した。

いつもの戦いとは随分と違つ戦闘法だぜ。
ミニ八卦炉を取り出した瞬間。

文の姿が消え、

「一瞬、視線を外したのが不味かつたですね」

右足を掴まれ、そのまま、真下に加速された。
高速の移動で、空気抵抗、風切り音。これが、最速の世界かあ。
一息つく間に空中で地面に向けて真下に放り投げられた。

「おわわあああ

風の中、見た。

地上で傘を真上の、一いち方に向けている人物。
風見幽香だ。

『元祖マスタースパーク』

極太の光に包まれて、思つ。
こつちが本命だ。
文はここに運ぶ役割かよ。
卑怯だぜ……。

「面倒臭い相手ね……」
「おや？ もう弱音ですか？」
「私達にたてつこうなんて」

ピチューん。

「なにするんですか？！」
「それはこつちのセリフよ」

橙を落としても、八雲藍がいる限り復活し続ける。
なるほどね。私とツムグの関係に似ていると思う。
それにしても、この状況はなんだ？
橙を落としたがいいが、まだ20匹ほどくるくると飛び回っている。
おそらく能力が、八雲藍の技だろ。う。
式を増やしたのではなく、幻影だ。
そうなると、本体を叩くか、八雲藍を叩くかしないと数は減らない
のだろう。

全く面倒ね。

ツムグがいたら、靈力込めた弾幕を360度面を張るように撃ちまくるのに。

靈力消費量と、スペルカード枚数を気にする。
スペルカードルールによる、提示された使用回数は3回。
修行不足ね。

『靈符・夢想封印』

複数の光弾が相手を覆い、追撃する。
落ちるのは橙ばかりだ。
だが、本体を落とせた。
ハ雲藍にも攻撃は迫った。

「残念、ハズレです」

スルリと抜けるように避けられた。
弾幕は弾幕同士でぶつかり、消滅してしまった。
追撃性が高いのが裏目にでたか。
目障りな橙が落とせたから良しとしよう。

紅魔館上空。

館は小さく見える。

十六夜咲夜は、主であるレミリア・スカーレットに命を受けた。
ツムグを博麗靈夢より先に奪還せよ。

しかし、と付け加えられた条件は、出来る限り身の安全を優先にすること。別に失敗しても良いこと。

なんとも妙なモノを感じつつも主の命を受け、十六夜咲夜は動いた

のだ。

「ここなどこで時間を潰してゐる暇はないんだけど……」

「ういー、ここは通さないよおーっと」

酔っぱらいに絡まれている。

見た目はお嬢様と同じく幼いが、同じく妖怪である。そして、

「私は鬼、あんたは人間。ってねえ。スカスカのナイフでまた戦うかい？」

挑発してくる。

「私の代わりにナイフを回収しますか？ 貴方なら簡単でしょう？」

挑発で返す。が、瓢箪ひょうたんをあお呪り、「クゴクと酒を飲んだのだ。

「？」

「摘みは？」

上目遣いで聞いてきた。

「

紅美鈴は珍しい事もあるものだと思っていた。

十六夜咲夜が飛び出して、あつと言う間に舞い戻ってきたのだ。しかも、伊吹萃香を抱っこした状態で。

「任務失敗……。病気が発病ですね。可愛い物に目がないのか、幼女に目がないのか」

レミリア・スカーレットは考えた。

鼻血を拭き終わった十六夜咲夜のことだ。

行つてらつしやいから間もなく、お帰りなさいだった。

しかも、対戦相手であろう、伊吹萃香を連れてきて、私とフランと萃香をテーブルに着かせ、咲夜は酒や、紅茶、お菓子に、摘みを運び、愛でる状態であった。

「なー、なー。これ、おかわり~」

クイクイと咲夜の袖を引っ張りおねだりする萃香に、咲夜は微笑と鼻血を顔に作り、悠々とメイドをやつていた。

「ダメね、この娘。早く何とかしないと……」

カードに込められるものは何か

配点：（紅白）

第五章 幻想の挾撃者（後書き）

登場させて欲しいキャラがいる方は感想などに書いてください。
参考にします。

なお、必ずリクエストされたキャラが登場するとは限りませんので
ご了承ください。

第六章 相対の覚悟者（前書き）

の小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第六章 相対の覚悟者

博麗靈夢と八雲藍は弾幕で弾幕を潰し合っていた。
それぞれ残りの使用できるスペルカードは一枚。
どちらとも切り札である。

弾幕と妖術で技のレパートリーが多い八雲藍。
勘と力押し、といった博麗靈夢。
だが、勝利したのは博麗靈夢であった。

スペルカード「夢想天生」を使用し、ありとあらゆるものから宙に浮く無敵状態で、八雲藍を殴り落としたのだ。

「まさか、体術とは……」
「しようがないわ、残り靈力があまりないもの」

防御結界の維持や、弾幕で消費が思つた以上に多かったわね。
藍の戦い方がこちらを消費させる消耗戦の戦い方だった。

「で？ 幽香が次の相手？」
「余裕があるのも今のうちね」

私の真下から空に傘を突き上げて高速で突き刺そうとしてきたのだ。
もつとも、当てる気がない挨拶程度の攻撃であった。
幽香は嗤い、右手の親指を首を切るように動かし、そのまま親指を地面に向けて挑発してきた。

「地上で殺りましょーう？」
「ナメんじゃないわよ！」

八雲藍は思つ。

損な役割だ、と。

式神である橙を回復させながら、風見幽香と博麗靈夢の戦いを観ていた。

今頃、紫様は何をしているのでしょうか？

ゲストを何人か招いて邪魔者を排除すると張り切つていたが上手く行つているのだろうか？

状況を確認するために橙とは別の式神を飛ばす。

まだ、1日半はあるが、大丈夫だろうか？

「ここに来て、必ずここに到達してくるのは貴女だと思つたわ。『動かない大図書館』の二つ名とは対照的な動きね」

「八雲紫？！」

八雲紫は風見幽香宅でツムグを監視していた。
ツムグは現在、幽香のベッドで眠つている。

幽香がいないが、自分の家のようにいろいろと漁つてみた。

何枚かパンツを頂き、紅茶と洋菓子を取り出してのんびりしていた所に、突如、扉が開いたのだ。

絶句している魔法使いのパチュリー・ノーレッジに言葉を掛けたのだが、私の名を叫んで驚いた。

「ち、ちゃんと準備してきてあるんだから！」

負けないわよ、と。言いたいのだらう。

しかし、

「まあまあ、紅茶、飲む？」

「飲まないわ」

こちらの手には乗らない。

「あり残念」

「どうゆうつもり？」

紅茶を口に含み、飲む。うん、我ながらいい出来だ。

「靈夢つたら、彼がいないと駄田娘だいだらう」

それに、と付け加え。

「多くの者が彼に依存しても困るしね。貴女のように」

「なつ」

顔が薄紅に染まる所が可愛らしこと想つ。

「彼、眠らせるけど。犯す？ それとも、自分だけのモノにしちやう？ 普通に起きないようにしてあるわよ？」

「ば、バカ言わないで！ 全く、何考えてるの？！」

と言いつつ、彼の姿を視線に捉えて、意識しているので、彼女もまた処女なのだろう。

「”私達”は頂こちやつたけど？」

貴女もどう？ 興味あるんでしょう？ と意味を含めて問うた。

「」

顔が薄紅から、深紅に染まる。

葛藤しているのか、遠慮しているのか。
だが、もう一押しだろう。

「靈夢のためよ？ それに誰にも言わないわよ？ ほら、本だけの
知識じやなくて、実体験も必要じやなくて？」

「」

パチュリー・ノーレッジは熱に^{うな}躊躇されたような足取りで彼のベッド
に近づく。それに伴い私がリードして彼に掛かっている布団を剥が
し、彼の全身を^{あいわ}顕にし、先日得た知識を彼女に伝えることにした。

風見幽香宅で二人の少女が忙し無く動いていた。

1人は魔法使いで、1人は妖怪であつた。

魔法使いは妖怪の手本に興奮して、自らを慰めながら彼のモノを一
人の口で喜ばせた。

十分に準備が整つた自分に恥を覚えながらも、彼に跨り、自分のペ
ースで彼と繋がつた。

妖怪は魔法使いの豊満な双峰と、自分が一番感じる所を同時に攻め
て彼女を淫らにした。

眠っている彼を相手にするには自らが動く必要があり、一回魔法使
いが果て、疲れを訴え、行為は終了した。

妖怪は伝えた。

体力をつければもつと楽しめる。

魔法使いは本氣で体力をつけようと決心したのであった。

地面は所々で抉れ、穿たれていた。

傘での難ぎ払い、突きの後である。

踏み込みで、地面が陥没し、移動で土煙が舞う。

穿たれる傘を闘牛士の様にヒラリと交わし、身を屈め、相手の勢いと、力をそのまま使用し、投げる。

風見幽香の剛に対し、博麗靈夢は柔である。

投げられた風見幽香は片手で地面を弾いて、はんてん翻転し地面に立つ。

「なかなかやるじゃない」

風見幽香は内心でほんの少し感心した。
センスの塊ね。

紫が試練を与えたがるわけだ。

鍛えればすぐに伸びるでしょうね。

来る。

こちらの攻撃を起点に反撃だったのが、あちらからも攻撃してくる
ようになつた。

拳を痛めない掌底がこちらに向かつて飛んできた。
女相手に顔面狙いとは容赦無いわ。

軽く頭を右に振つて避ける。

「私程度の打撃を避ける。失敗ね」

掌底を放つた腕が顔面横をすり抜け、腕が首に回された。

「首投げ。決まり！」

体が回転し背中から地面に落とされた。
柔術か。

「この程度、効かないわ」

「自分の胸を見てみなさい」

言われて胸を見た。

背筋に冷たいものが走る。

胸には符が貼られて、おまけにスペルカードも付いていた。

「遠隔、ゼロ距離『夢想封印』！」

決まつたわね。

光と爆煙に包まれた先。幽香の立つていた所に視線を向ける。

符を介した、スペルカードの遠距離発動。

私だって、何もしていられないわけではない。

実践で使用するのは初めてであったが、日常生活で遠距離発動の符はよく使う。

朝、寝転がつたまま着替えを転送したり、冬に動きたくない時に色々な物を手元に転送したり、無駄に便利な技術を思いつくなあとツムグに小言を言われたが、これも修行と言い訳をしておいた。

スペルカードにも使えると知ったのは先日モノは試しにと思って実験した時だが。

突如、土壁が目の前に生えるように現れた。

「これは、パチュリーの？！」

氣を取られ、土壁の向こう側、妖力が急激に膨らんだのに反応がおくれ、

最大出力・『元祖マスタースパーク』

全てを穿ち向かつてくる巨砲の光に包まれていった。

風見幽香の胸元は露わになり、下着と、谷が見えていた。
所々、焦げ、破れ、土埃で汚れていた。

目の前には地平の先まで地面が穿たれた後があり、

「あの距離、あのタイミングで防御が間に合つたみたいね」

博麗靈夢の姿があった。

「お陰様で、余計な靈符とスペカを使ったわ。それに服も汚れたわね。それはお互い様みたいだけど」

パタパタと服の汚れを払い靈夢は言葉を放ってきた。

「まだ続ける？まあ、私の勝ちだけど
「なんですつて？！」

そこに八雲藍が割り込んで、

「えーと、説明すると、スペルカードルールの決闘開始前のカード提示もなければ、不意打ちによる攻撃の反則、それに、超小声で靈夢さんはスペル力使用回数を自分は2回、風見幽香は1回と宣言します。幽香さんはスペルカードの『マスター・スパーク』を攻略されたことで負けです」

それに、と靈夢が付け加えるよ。

「スペルカード対決は一対一の決闘よ？ それに横槍を入れたパチュリーがいるから私の勝利か、よくて無効勝負ね。ま、もう一戦してもいいけど。どうするの？ やる？ やらない？」

「やめとくわ」

これ以上続けたら目的を忘れてしまいそうだから。

眠り姫を起こすのは誰か

配点：（主人公）

第六章 相対の覚悟者（後書き）

登場させて欲しいキャラがいる方は感想などに書いてください。
参考にします。

なお、必ずリクエストされたキャラが登場するとは限りませんので
ご了承ください。

第七章 夢見の眠り姫の追想（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第七章 夢見の眠り姫の追想

博麗靈夢は自分の勘に信頼を置いている。

風見幽香が割りと素直に敗北を認めた時点でこの先、何かあると勘が告げていた。

「珍しいわね。パチュリー？」

外出はあまりしないはずのパチュリーが外にいた。
その上、こちらの敵対する行動を取り現在は、唸っている。

「今度の件に私も絡むから」

ちょっととした詐欺に引っかかたような物言いだつたが、紫が何かしたのだろう。

それにもしても、体力、靈力量ともに心許ない位に消費している。
それでも、負ける気などしない。

何故なら怒っているからだ。

自分自身で怒っていると自覚しているが、表に出さないよつこじしている。

「臭いわね」

「え？」

男臭い、女臭い。男女の行為後の臭いがする。
パチュリーから臭う。確実に相手は彼だろう。
嫉妬ね。初めての経験だわ。

「さあ勝負よ！」

夢を見ていた。

幻想郷を旅と称して周つていた時の光景が見える。

「あたいつたら最強ね」

チルノだ。

氷の妖怪である彼女を見たのは旅を始めてすぐの事だった。
誰彼関係なく、勝負を挑むチルノに見つかりスペルカード勝負の末、
負けた。

今思えば、この出会いが全ての始まりであつた気がする。

「師匠ー！」

「このバカ弟子があー！」

チルノが師匠で、俺がバカ弟子であつた。

勝負の後に俺を鍛えるという名目で俺の旅の同行者となつたチルノ
だが、俺の【力を分け与える程度の能力】の有効性に気が付き自称
幻想郷最強から他称幻想郷最強へとシフトしようと思惑があつた。
そして、俺が怒られる理由は、妖怪に追われてチルノに助けを求め
たからである。

名も無き妖怪は氷漬けの標本となつたのだ。

「うーん。やっぱり、バカ弟子と一緒にあたいの最強がもつと最

強ね

「師匠は何を言つてゐるんだ？ それより、次の目的地はあそこ
の山ですよ」

山の麓に入り数歩の所で、

「毎度お馴染み、射命丸です。人間と妖精の珍しい組み合わせです
が、人間の立ち入りは危険ですよ？ まあ食べられてもいいという
なら構いませんが」

どこからとも無く現れた射命丸文との邂逅だった。

「なんと！ 私が負けるとは！？」
「あたいつたら最強ね！」

高速移動の射命丸文に対し、チルノは全方位弾幕で対応し、避け切
れなかつた射命丸文が負けたのだ。
どちらかと言うと、わざとギブアップした感じであつたがチルノは
気付かなかつた。

「なるほど、貴方の能力で、チルノがあんなに戦えるんですね」

チルノの強さに疑問を抱いた射命丸文の質問に俺が答えたのだ。
ワザと負けて、こちらの手を読んだのか？ と射命丸文に疑惑を持
つたが、唯のパララッチだつた。

「わざわざ、歩いて幻想郷を周つてゐるんですか！？ 変わつた人
間ですね。それに、何故、全裸？」

意味もなくよく全裸になつていた。

決して暑かつたから脱いだとかじゃない。
趣味だ。

「ツムグってバカなのか？」

バカにバカと言われて凹んだ。

師弟関係の為、強く文句が言えなかつた。

その後、射命丸文と別れ、大ガマに飲まれた俺をチルノが助け、それが記事になつたのだ。

大ガマは本当はチルノを懲らしめようとしたのだが、誤つて俺を飲んでしまつたと謝罪された。

見た目はカエルだが良い奴だつた。

チルノにカエルを凍らせて遊ぶのは良くないと説明して納得してもらった。

川辺で河城にとりと激突した。
相撲である。

「ぐぬぬ」

「久しぶりの盟友との相撲だね」

河城にとりは突つ立っている状態で、俺は全力で胴にタックルしてい
る状態である。

良い匂いだなあ、と思うがビクともしない。

自称、人見知りの技術者でカツパを見つけたのは偶然である。

光学迷彩スーツでこちらの様子を見ていた河城にとりに俺が、

「カツパいんのかな？」

と言つた矢先に、

「げげ、何故見つかつた?」

呼んでもいなのに現れた。

カツパと言えば相撲、きゅうり、頭の皿であった。
そこで相撲勝負が何故が始まった。

そして、

「嘘みたいだろ? 俺、負けてるんだぜ……」

普通に負けた。きゅうりの栽培を強制された。
しかし、成長力など与えてインスタントきゅうりの速さで成長、収
穫、きゅうり祭りだつた。

「うまいっ! 力が、力がみなぎつてくれるよー 盟友!」

きゅうりが好評で、しばらく、にとりとチルノと俺は河城にとり工
房に世話になつた。

世話になつたと言うよりは、うまいきゅうりの為に押し留められた
と言う方が正しい。

しかし、カツパの技術力は世界一イイイイ!

「光学迷彩に、自動小銃か、戦争屋?」

「外人ってのは物知りだな。初見でこの技術力を理解できる盟友
は少ないというのに。なあ、技術力すら、供給できる君を……。い
や、旅の途中か、暇ができたら、またここに来るといい、カツパは
君を受け入れるよ」

ついでに、

「その時はきゅうりを頼む。ま、きゅうり栽培施設の完成で年中新鮮なきゅうりが取れるようになつたが、君の作るきゅうりが一番うまい」

最新農業を遙かに超えた技術力で河城にとりは俺の発案の年中きゅうり栽培施設を完成してしまつた。

かつぱを総動員して一週間。

兵器開発はお値段異常にとり。

チルノはこの間、何故かバスター・ソードを手に入れ、振り回していた。

分解、結合出来る剣で、分解するとアイスのスイカバーのような剣と、これまた、アイスの当たりと書かれたアイス棒を剣にしたような形状であった。

さらに、2本のチョコエッジ、2本のウエハースブレイドの4種6本からなる剣で構成されている巨大な剣、バスター・ソードを俺に見せつけてきた。

仕込みが多い剣だ。

まさか、アドベントチルノとは。面白そうなのでそのままにしておこう。

武力、知力、靈力、成長力を与えるとチルノは最強氷精剣士アドベントチルノ、つまりAチルノに姿が変わる。
身長、髪が伸び、美少女に恥じない見た目に胸も僅かな膨らみを持つ。

それを見た河城にとりは、

「うーん、剣にスペルカードを仕込もうか。スペルカードルールに合つように改造だよ！」

「ええ、頼むわ。にとり」

ノリノリでカツパ印のバスターードを完成させた。

「今、この時より、あたい、改、私はAチルノと呼びなさい。バカ

弟子」

「はい、Aチルノ師匠」

本人もノリノリであった。

【号外！ 妖怪の山に最強剣士現る？！】

文々。新聞の見出しである。

記者こと、特派員、射命丸文は妖怪の山での異変を追つた。近頃、妖怪の山で妖怪退治をする剣士がいるという噂の真相を確かめるべく、特派員である射命丸文は上司の命令で、渋々巡回しているところであった。そこに現れたのが、噂の剣士であった。その正体は氷の妖精、チルノ氏であった。

以前の彼女をしる私は驚愕した。

彼女の容姿は、変わっていた。写真を参考にして欲しい。

以前のチルノ氏。

現在のチルノ氏。

見ての通り、以前の幼い氷妖精が、現在は美少女の氷妖精に成長していたのである。

現在のチルノ氏は以前とは違い、巨大な剣を所持しており発言から

知性を感じた。

『あら？ 取材かしら？ 私、悪い妖怪退治で忙しいから後にしてくれる？』

『そう言いながら、一いち方に剣を向けないでください。取材です。取材』

巨大な剣を向けられた時、命がけの取材になると私は直感した。

『どうしてそんな姿に？』

『必要だつたからよ。私は正義の味方だもの』

『正義の味方ですか、その、これから的目的は？』

『荒事を解決する何でも屋だから、依頼があれば引き受けるわ』

現在のチルノ氏はこのように語った。

『Aチルノをよろしく』

巨大な剣を軽々と抱え私の元を飛び立つていった。

次号！ 特派員、射命丸文はAチルノ氏を追う！ をお楽しみに。

視点は原点に帰り、原点は現在に至る。

配点：（夢）

第八章 氷妖精と神々の信仰（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第八章 氷妖精と神々の信仰

「私は最強よ。負けたことに恥じることはないわ」「うそ、私が負けるなんて、うつう〜〜」

Aチルノに敗北して、遁走するのは犬走桜であった。
可哀想に。今のAチルノは俺の供給があるので無敵状態に近い。
Aチルノ状態を保つには力を分け与え続けなくてはならない。
しかも、

「私が負けるまではこのままでいるわ。いいわね？ バカ弟子」「了解です。師匠」

負けるまでは元に戻るつもりがないらしい。
俺にとつては、身を守る為の盾と剣であるチルノが強くなってくれたので助かる。

Aチルノと相対する際、踊つていたり、全裸になつて見たり、クルクル回つてみたりと、相手の注意を引いて隙を作つていた。
犬走桜は全裸の辺りでAチルノにやられた。

うん、なんかごめん。

既に姿が見えない犬走桜に謝罪。

「妖怪の山にやたら強い奴がいるつて聞いて、期待して来てみればツムグだつたか」

「ん？ 萩香か。Aチルノ師匠。鬼ですよ。鬼」

俺と伊吹萃香ではアリと象。それほど実力の開きがある。

よつて、Aチルノに全てを押し付ける事にする。

「氷の妖精が、随分と物騒なモノ持つてゐるな。ツムグの供給つきとは、めんどくさいな。よし、酒とつまみで見逃すよ
「バカ弟子、鬼と知り合いとは聞いてないよ?」

聞かれてないもの。

押し付ける相手が敵になつただと?!

結局、Aチルノに叱られ、萃香の酒と摘みを強制的に用意させられた。

河城にとり工房から頂いたものが残つていてよかつたと心底思つ。

「それでなあ。私の事を直ぐに鬼だつて、言つてくれてなあ。俺はこの娘の言つことを全面的に信頼する。とか格好つけて、なかなか面白かつたなあ」

俺と萃香の出会いなどを酒の肴に語る萃香。
それを興味深く聞いているAチルノ。

「バカ弟子は、色々知り合いが多いのだな」

「妖精を師匠に持つ人間か。最下位生物だな。はは、笑わせるなあ。そうそう、この山に神が住んでるぞ。力試しつてなら、やってみるか? 神殺し?」

酔っ払いの戯言が翌日、現実となる。

守矢神社には神様がいる。
それも2人もだ。

その神様2人は異変に気づいていた。

「諏訪子。気付いてる?」

「うん、神奈子。ちょっとこれはお仕置きが必要だね」

八坂神奈子と洩矢諏訪子である。

2人は妖怪の山での動きを知覚していた。

八坂神奈子は思う。

お仕置きとは仲間の敵討ち的な意味でかしら?

力エルが氷漬けにされて、怒っていたのは記憶に新しい。随伴する人間の評価は力エルを助けたことで好意的だ。

それでいいのか? 神様的に考えて。

しかし、これ以上、信仰を減らされても困る。

「同胞たちの報復を兼ねて、私が迎え撃つ。久々の敵よ、敵」

グッと両の手で拳を握る姿が愛らしい。

「見るからにダメそうだ」

「何か言った?」

「いいや、あの人間に気を付けなつてね」

”見て”いたが、変な踊りと全裸で隙を作る役のようだが能力持ちだと当たりを付けている。

「あんな踊り、神に通じるわけないよ。せめて舞ならわかるけど。アレは、ないよ。何かの能力持ちで、あの氷の妖精に使われてるんじゃない?」

確かに、身の回りの世話をしているのはあの人間だ。

「神に背くかあ。いいね。骨のある相手だといいけど。そう言えば

早苗は？」

「信仰集め。布教で人里」

「早苗さん」

「きやー、早苗さんよー」

「布教路上ライブ始まるよーー。」

わー、と人集りができ、音に合わせて踊る、歌う。

「いーのおー空にいー」

人里は今日も平和です。

「はつはは、こりや面白い。祟り神と知るか。私の名も知つてると
はどこぞの巫女とは大違い」

「つ！ バカ弟子！」

金属音が響く。Aチルノのバスターードが洩矢諏訪子の鉄の輪を
弾いた音だ。

パツと見、金髪口リ少女が境内にいた。

それを洩矢諏訪子を知っていた俺が話しかけ、守矢神社の事に關して盛り上がつて来た所で何故か攻撃された。

「さあ、神遊びしましょ？」

数回の攻防があり、

「うん。わかつた。そんじょそこらの妖怪じゃ相手にならないわけだ。そっちの人間。全裸はいいけど、この氷の妖精の世話役じゃなくて、力を分け合っているんだね？ 崇つてやろうかしら？」

俺の能力がばれたのだ。

流石、神様。

あと崇りは勘弁な。

諏訪子は一度しゃがみ、カエル座り状態になり姿を消した。

「速い！」

地面が削れる程の加速と、姿が消える程の高速移動であった。

「狙いをバカ弟子にするとは、それでも神様か？」

「なあに、崇り神だからね。何を言われようと気にしないさ」

「ケロちゃん」

「あーうー、ケロちゃんって言つたなあ！」

あら、何この可愛い生物。

冗談は置いて、俺がやられるとAチルノ化が解けてしまう。汚いぞ崇り神。いや、弱点を見抜き正確に攻めてくるから正解か。それにも、ケロちゃんって呼び方、定着してゐるね。

防戦だ。

Aチルノは俺を狙う諏訪子を防ぎ、諏訪子はそれを見越して攻撃する。

互いに譲ることなく、弾幕を撃つ、斬撃を放つ、何故か、殴りあつ。ここまでの大戦は初めてだ。

改めて、神様と戦っているんだ、と自覚した。

供給ありで、決着がつかない相手は今まで初めてだ。一瞬のことだ。

諏訪子とAチルノが取つ組み合いになつたその瞬間に、一人もろとも巨大な御柱に潰された。

「師匠ー！」

飛び出して助けよつと思つた矢先、身体が浮いた。

「神相手によくやつたと思つよ？」

「は、離すな！ 当たつてんのよ！」

「……へえ、面白いわね。幻想郷には変わつた人間も居るのね」

八坂神奈子だ。

当たつているのは持つものの柔らかさである。後ろから両脇に腕を通され抱きかかえられている。抵抗したが、力負けしている。ビクともしない。むしろ、背中に感じる柔らかい物がボヨンボヨンで良い感じである。御柱が音もなく持ち上げられ、空の彼方へ放り投げ捨てられた。

「もー、何すんのぉ？」

諏訪子である。

「仲間」と潰すとは思わなかつたわ

Aチルノである。

土まみれであるが、一人共無事であった。

両者は視線を合わせ、

「私たちの勝利」

「私たちの敗北」

諏訪子が勝利宣言し、Aチルノが敗北宣言をした。

Aチルノは

「バカ弟子が！」

「俺に戦闘は無理だよ」

チルノに戻る。

「あー、楽しかった。じゃあね。そろそろ、大ちゃんが心配するから帰るね」

別れの挨拶も無しに飛んで帰ってしまった。

「おーい、俺を置き去りかよー！」

「さ、君はこっちに、やっぱ勝負のあとは宴会だよ」

神奈子に捕らえられた俺を見ながら諏訪子は言った。
そして、神社の方へ運ばれることになり、

「酒も、食事もある。ゆっくりしていくといい

神奈子が耳元でそりいつた。

【号外！ また守矢か？！ 信仰と布教の代行者に男の陰？！】

文々。新聞の見出しである。

Aチルノ氏を追っていた記者こと、特派員、射命丸文は見た。なんと、守矢神社の神に挑んだAチルノ氏。

しかし、激闘の末、Aチルノ氏は敗北し逃走した。何故かその場に取り残された一人の男性が守矢神社の神々に囚われたのだ。

その数日後、皆さんもご存知であるだろう。

守矢神社に参拝者が激増したのだ。

東風谷早苗氏の路上ライブが神社を使った壮大な、コンサート会場になつたのは囚われた男性の発案であると特派員は推測する。その証拠が、ある。 [写真をどうぞ]

人里で東風谷早苗氏と宣伝する男性の姿。

神社で男性とコンサート会場を設計する八坂神奈子氏と洩矢諭訪子氏。

守矢神社に日々集まる信仰、今後の守矢神社に特派員、射命丸文は密着する

次号！ 守矢神社の真相。暗躍する男性は何物か？ をお楽しみに。

信仰と進行。

進む道に集まるものは何か

配置：（布教）

第八章 氷妖精と神々の信仰（後書き）

初の予約投稿

いつのまにやらお気に入り登録が増えていた。

嬉しい限りです。頑張ります。

しばらくH口成分は発生しません。

第九章 閉鎖内の権力者（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

神社コンサートは盛況に終わる。

境内で売られるものは、絵馬、酒、食事、コンサート通行証、東風谷早苗関連グッズなどである。

コンサート通行証にはスタンプ欄があり、一定のスタンプを集める
と、東風谷早苗と握手できたり、直筆の手紙が貰えたりできる。
神社コンサートの参加は、無料である。

しかし、コンサート開始時間はご飯時である。

開始までに会場である神社で食事を済ませ、酒や飲み物を片手に、
コンサートを見るのがツウの楽しみ方であり、信仰者は、コンサー
ト通行証を首から下げ、腕に守矢神社信仰者の証である守矢腕章を
つけているのが特徴である。

信者と呼ばれる人々がいる。

東風谷早苗の歌を愛する者たちだ。

触れるのはスタンプ集めの結果のみで、普段は触れず、見守るスタ
ンスである。

彼らは守矢神社を信仰しており、布教活動を自主的に行うのだ。
また、神社への奉納品も忘れない。

賽銭である。

収入の少ないものは畠でとれた物を。

収入の安定しているものはお賽銭を。

それぞれの生活にあつた奉納品を納める。

また、賽銭を納めると東風谷早苗が笑顔でお礼を言つてくれる。

そのため、収入の少ないものは必死に働き、稼ぐのだ。

神社コンサートには人間以外の存在もいる。

音楽を楽しむもの、宴を楽しむもの、嫉妬するものなど様々な妖怪がいる。

妖怪の目的は酒であつたり、帰り道の人間を驚かせて楽しんだり、さまざまな楽しみ方をするが、人間を襲うことにはなかつた。

それは、神がいるからである。

それも、信仰を集めた為か、莫大な神力を発する神が人を襲うことはならぬと宣言したからである。

幻想郷では妖怪と人間が共存している。

故に、人間を襲う妖怪も少なからず存在する。

しかし、妖怪がゆえか、禍々しい神力を持つ神の言葉を無視することはできなかつた。

森近霖之助は自分の店を趣味で経営しているようなものである。

閑古鳥が鳴く古道具屋にある日訪れた客があり、声を通すマイクと、音を拡張するアンプなどを購入した。

道具の名前と用途が判る程度の能力の通り、それらの名前と用途は知つていたが、何をどうすれば動き出し、動き出すのに何が必要なのか分からなかつた。

それらを購入し、満足した様子を示した寄に思わず話しかけたのだ。

「使い方がわかるのか？」

「あ？ ああ」

つまり、彼は外来人の可能性が高い。

外の世界の商品を扱うのができるのは外来人だ。

彼は急ぎの用事ではなかつたらしく、話し込んでしまつた。

何でも、守矢神社で使うらしく、その為に色々働いているらしい。ついでに参加と宣伝を頼まれたが、数時間に及ぶ僕の話に付き合つ

てくれたお礼と、快く受けた。

そして、当日に、驚いた。

人と、妖怪が混在した人集りもそうだが、

「機械？ それも高度な技術だな。なんだ、この河城にとりっぽい印は？」

「そりやあ、にとり達に協力して貢つてゐし。きゅうりはどうかね？」

発電設備に、蓄電器、変電設備まである。

それらの機械周辺に河童たちがきゅうり片手に調整を行つていた。

旨いな、このきゅうり。

「河城にとりと知り合いか、旅をしていたと聞いたが、なかなか知り合いが多いようだ」

氷の妖精は飲み物を冷やしているし、妖怪が露天屋台をしており、焼鳥やウナギなどを売つてゐる。

演奏はプリズムリバー三姉妹か、妖怪だな。歌い手は人間の東風谷早苗か。

なんとも、幻想郷らしい光景だ。

東風谷早苗は戦慄していた。

こんな簡単に信仰が集まる。

今までの地道な活動が実を結ぶという喜びと、それに比例した信仰の集まりに驚き、震えた。

幻想郷入りする前、ニュースで神社でコンサートをするアーティストがいたのを知っていたが、まさか自分がそれを行うことになるなど、思つてもいなかつた。

信仰がそのまま力になる神様一人は、まさしくその神に相応しい力と、威儀を持つていた。

が、これはなんでしょう？

食卓でハ坂様、洩矢様があり、その間に男性がいる。ツムグさんだ。

並ぶ料理は彼が作ったもので、

「うまいなあ」

「ああ、うまいなあ。酒もうまい、飯もうまい。信仰も集まる。言うこと無いね」

食後にも、

「洋菓子かあ。ほんのり甘く、香りづけに、これは洋酒か」「ケーキと言うものは初めてだが、うまいじやん」

幻想郷でデザートを食す神一人。

もう片方はグダーと、寝転がつて、どこから仕入れたのか、マンガを読んでいた。

片方はグダーと、寝転がつて、どこから仕入れたのか、マンガを読んでいた。

洗い物や、掃除洗濯まで彼が行なつており、助かるのだが。下着まで任せきりで。

信仰心が……。

自室ではダメダメです。

「それで、ツムグさんは今まで幻想郷を周つていたんですか」

今までのツムグさんの話を聞いていた。
力を分け与える程度の能力、それがツムグさんの能力らしい。

「供給できる”力”は、試した所、殆ど何でも”力”が付けばできるみたいだよ？ 神力も試してみたらできたり、信仰力はできなかつたけど。求心力はできたから、二度目のコンサートには今回参加してくれた人達は次も来ると思うけど」

反則ですね。その能力。

欠点は自分自身に力の供給ができないことですね。

思うに、彼がここに居続け、能力を使ってくれるのなら、信心は幻想郷全てに広まるでしょうね。

それを、見抜いたハ坂様、洩矢様、流石です。

「アンケート用紙ですか、コンサートを週何回して欲しいか……ですか。殆ど、毎日に丸が付いてますね」

「来賓にあの蓬莱山輝夜が？」

ハ坂神奈子は驚いた。

引き籠りの姫がねえ。

よく、永琳が許可したものだ。

「てゐがこの前のコンサート見に来てて、今度は輝夜も誘つてみればって言つたらこうなつた」

旅をしていたと話を聞いていたが、永遠亭の辺りは迷いの竹林があ

り、結構危険なんだがなあ。

「まあいいじゃないか。信仰は何者も拒まない。ま、私はどうでもいいけどね」

「どうでもいいけど、と言しながらツムグを見るのは、アレだ。
狙ってるのか。
対するツムグは、

「あれ？ 謐訪子が眼の前にいるのに、後ろから声が聴こえるだと？」

ツムグの前にあるのは諫訪子の帽子である。

「諫訪子さん、諫訪子さん。どうして今日はそんなに小さいの？」

地べたに置いてある帽子にツムグが話しかけていた。

「諫訪子さん、諫訪子さん。どうして今日はそんなに大人しいの？」

「それはね。アンタの目が腐ってるからだよー。」

打撃音が響き、障子を突き破り、境内へ投げ出された。
ツムグは好きだなあこのやり取り。

諫訪子の帽子を何故か、諫訪子本人だと認識するというボケがお気に入りのようだ。

「諫訪子、障子とか修理しつづけ

「神と同じ卓に付き、晩酌をするのは長く生きてるけど、初めての体験ね」

「姫さま、お泊りになりますか？」

蓬莱山輝夜とハ意永琳である。

コンサート後、夕食に呼ばれ、断る理由もなかつたので来たのであつた。

ハ意永琳は思う。

断れ！

「そうね。やめておくわ

ホッとする。何故泊まらないのかと聞こいつと思つたが、なるほどね。洩矢諭訪子とハ坂神奈子の視線が、全てを物語つている。

強い視線だ。
だが、

「ツムグを気に入りましたか、私達の様に」

牽制、しておくだけしておこう。

彼は心地の良い存在であるが、それは猛毒にもなる。

「言葉が過ぎるわ。永琳」

注意された。続き、

「気に入ったのではなく、愛しているのよ？」

わかつてるの？ という口調で、頬を染めて、熱のこもつた視線で。ツムグを舐めるように犯した。

「はいはい、嬉しいなあ。愛されて」

「かわ
躲されてますよ。輝夜様ー。」

「相変わらず、ね。元気そうで何よりよ。あまり、やり過ぎると、博麗の巫女にまた、ドヤされるわよ。ううね。その時はまた、私の所に来なさい。永遠に置つてあげるわ。今度はしっかりと準備をしてね。そして、ツムグは私を犯せばいいわ。素敵！」

「おい、永琳」

「はい、わかつてゐるわよ。えーと、お薬はひとつ」

頭を正常に戻す薬を投与した。

ツムグの事になると輝夜様はちょっと頭がおかしくなる。

それはそれで、愛らしく、乙女のようで可愛いのだが、長く続けると、本当に発言を実行しようとするので、薬で正常に戻すのだ。

「また、誘つてくださいね。それと、こひらにも遊びに来てくださいね」

始まりがあれば終わりがある。

洩矢諏訪子は終わりが近いことを感じていた。

博麗の巫女が動き出した。

監視役のカエルからの報告だ。

ツムグの事を想う。

いい拾い物をしたと始めは思つた。

次に、自分達を知る、珍しい人間だと思い、興味が湧いた。

感心したのは、能力であり、信仰を集める手段と結果であった。

私を子供扱いする時があるが、冗談であり、本当は尊敬、敬つてい
るらしい。

彼は私の話、つまりは歴史の話が好きらしい。
どうも、妖や、その類の話に興味があるのだ。

私と神奈子の昔話を聞いた後、静かに頷き、感謝を述べ、彼は笑つ
たのだ。

「忘れられるというのは、悲しい。けど、俺は忘れない。幻想郷に
は沢山同じような奴がいるけど、その全員の事を刻む。書物にして
残すか、阿求もしてるけど、俺は冒険記風にして違いをつけて販売
してみるか。売れるかは別として。うん、それがいいな」

後半の事はほつておいて。この時からだらうか。

意識し始めたのは。

もちろん、男性として。

子をなすか、久しい女の感情を思い出し、少し濡れた。

神奈子、早苗も含めて孕ませてもらつたら面白いかもなあ。

こいついうものは惚れさすのがいい女といつものだ。

まずは女を意識させるために、触れ合つか。

ん？ 神奈子が私を見ているが、コレはちよつと話しあう必要があ
るね。

戸惑っているのか。初々しい。

夢は終焉を迎へ、目を開ける先に見えるものは何か。

配点：（記録）

予約投稿は便利だと気づく。

第十章 幻想者の宴会前（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

眼の前には悠然と佇む博麗靈夢と霧雨魔理沙と十六夜咲夜がいた。彼女達の目的は守矢神社の異変解決である。

人里の人々に活気があり、仕事も真面目にこなし、収入などを、守矢神社に奉納するのは別段悪いことではない。

また、自主的に守矢神社の布教活動にも問題はない。

しかし、力をつけ過ぎた。

行き過ぎた力は幻想郷を滅ぼしかねないと危惧した八雲紫が博麗の巫女に依頼。

それを聞いた博麗靈夢は、納得する。

お賽銭の量が回復していたのに、急に減った理由がわかつた。

それに、数日前から幻想郷を覆つ程の神力を持つ二人の存在が気にかかっていた。

抑えていたから問題ないかなあと思っていたが、八雲紫はそうは思わなかつたらしい。

あのバカが絡んでいるなあ。

準備をしていたら、魔理沙と、咲夜が私の所に訪れ、付いてきた。

「三人と三人。いい？ 勝利条件は誰かが残つていれば勝ち。ツムグ、供給タンクの使用はなし。こちらが勝てば、ツムグは帰宅すること。私達が負けたらツムグは旅に出る。これでいいわね？」

「勝つても負けてもツムグはココを去るじゃないか」

はあ、と溜息をつき。

「当たり前じやない」

作戦会議だ。

「私は諭訪子。魔理沙は神奈子。咲夜は早苗ね。誰かが速く相手を倒せたら、援護すること。腹が立つことに、参謀としてツムグがいるからゴリ押しでいくわよ。あと、下手にアイツに気を取られないこと。わかった？」

絡め手、というか、人の特性を見抜いて適材適所で使うのが上手いツムグに対して最善手は力押しだ。

アイツは自分で何もできない分、人を見る目と使い所がうまい。

それに、力押しで行けば相手も力を使わざるを得ない。

溜まつた力を消費することで、異変解決にもなると思う。私達が来たことで、ツムグも理解したのか、あちらの三人を説得し、私達が勝てば旅に出る。私達が負ければもう少しじだけ滞在して旅にする、しかし、月に一度は顔をだすなどの条件で相対することに同意させていた。

また、口が上手くなつたわねえ。

昨晩は無理やりではあるが、一緒の風呂に入るまで達成したのに、ハ雲紫に邪魔された。

「明日、博麗の巫女がここに来るわ。溜まつた力は抜かないとね」

それだけ言ってスキマを閉じた。

それを聞いて、色々話しあつたり、一緒に寝たりで結局、惚れさせ

るまでには至らなかつた。

あーうー。

しかし、こちらが勝利すればまだしばらく滞在するといつ。その時は強行手段だね。

早苗と神奈子は奥手だし、私から行かないと、進展が遅いだろうね。まあ、負けても月に一度の訪問の時にやつちやえればいいけど。負けるのは癪に障る。

駄目だな。負けを前提に考え方をしてしまつていた。神力は全盛期に近い位に溜まつてゐる。

「さあ、人間、神を楽しませろよ？」

東風谷早苗と十六夜咲夜はお互に睨み合い、動けずにいた。

「時を操るとは、聞いていましたが、厄介ですね」

「奇跡を起こすつて、なかなか面倒な能力ね」

時を止めてナイフを投擲しても、奇跡的に回避される。

それは、転んでハズレたり、足をもたつかせて、躰されたり。とにかく、当たらなかつたのだ。

初見の投擲で仕留めるつもりが、随分と手間を取らされていた。ならば、と

「これはどうかしら？」

幻世：「ザ・ワールド」

時は止まり、その中でナイフを投擲する。

「そして、時は動き出す」

縄に、ナイフが刺さる。

身体を狙うのではなく、衣服に狙いを定めた投擲であった。ナイフは勢いを落とすことなく、刺さり、投げられた相手は地面に貼りつけられた。

「まるで、虫の標本ね。アリー・ヴェデルチ『さよならよ』」

霧雨魔理沙は天才ではない。

努力型の人間であり、時に天才を打ち負かすこともある。

絶え間ない努力の末、自信があった。

しかし、今、心が折れそうになっていた。

スピード、威力、弾幕、魔法、フェイクに、秘術まで用いたが、まるで、役に立たない相手にブチ当たっている。

八坂神奈子だ。

弾幕はパワーだ。火力でゴリ押ししたが、躱され、防御され、時には叩き落されていた。

残りのスペルカードは一枚であった。

「くそつ。私は弱いのか？」

「いや？ 人間にしてはやるほうだ。随分と成長している。正直、少し驚いた」

少しかよ。ちくしょう。

あーあ、こりや負けたかな。

それなりに、力を使わせたと思うが、所詮、それなりだ。

玉碎覚悟で最後のスペルカードを使う。

魔砲：「ファイナルスパーク」

八坂神奈子は思つ。

人間とはかくも素晴らしいものだ。

霧雨魔理沙に神力の一割ほど持つていかれた。
成長している。

「我の勝利だ。人間にしては奮闘したと思つぞ？」
「うつせー。バー力。いずれ、倒してみせるぜ」

いいだらう。それは楽しみであり、期待できるものだ。
神遊び。神と遊んでくれるか。

やはり、幻想郷はいい。

それを愛すモノは多いだらう。

私も同類か、と思う。

ツムグなどその最たるものだ。

旅は幻想郷を周ることであり、その各地に存在する妖怪や人間と交
わり、自分に刻み、それを書籍にするらしい。

戦う力はないが、協力者がいれば最高のパフォーマンスを發揮する。
諏訪子に神社を任せて付いて行こうかなあ。

「つむ、ツムグには感謝せねば」

旅は退屈しなさそうだ。

ならば、良い思いつきだ。よし、ついてここへ。そつしょ。

「？ ま、アイツには色々世話になつたり、世話してるが、感謝は

したことなかつたぜ。何せ、そういうの嫌うからな。アンタも直接感謝とか言うなよ？ 照れると全裸になつたり、全裸になるから」

博麗靈夢と洩矢諭訪子の相対は弾幕の張りあいと、回避行動が折り重なり合い、見るものに感動を与える程の芸術性の高いものとなつていた。

「美しいぜ」

「ああ、諭訪子も本気だ」

観客と化した霧雨魔理沙と八坂神奈子。

「あの、私、いつまで貼り付けに？」

「戦いが終わるまででしょうね」

未だ、地面に貼りつけられている東風谷早苗と、どこからか、テープルとティーセットを持ちだした十六夜咲夜。

四人は既に空で行われている弾幕ごとこを鑑賞しており、あの一人の勝敗に自分達の勝敗を賭けていた。

つまり、博麗靈夢が勝てば博麗靈夢達の勝利、洩矢諭訪子が勝てば洩矢諭訪子達の勝利となる。

「ケーキ食うよね？」

ツムグはといつと、ケーキを配給していた。

「よろしいのですか？」

「何が？」

私の間に、頭を傾けたツムグ。

紅茶を一口飲んで、うん、いい出来だ。

「守矢神社に加担していたのではないのですか？ とお嬢様は仰っていましたが」

「俺は提案と協力者に話をしただけだよ。それが大事になった。今は反省していると思いたい」

駄目ね。この人。速く何とかしないと。

ツムグは私の口の付けた紅茶を奪い取り、

「盗いな

「なにするんですか？！」

間接キスだ。

「別に減るもんじゃないだろう？ あ、紅茶は減つたか、まあ、ケーキと合うから問題ないな。うん。さすが、メイド」

ナイフで刺していいだろうか？

本気で刺そうかどうか迷っていたが、ふと、ツムグが空を見上げた。それに釣られるように空を見ると。

「うーん。諏訪子が負けるか。さすがに強いなあ。靈夢、また腕をあげたな。上出来である」

「まさか、靈夢の腕試し？ いや、八雲紫様が言う所の試練ですか？」

仕組まれたことでしたのか？

「いや、そう言つておけば怒られないと思つてゐただけだぜ」

ガクリと肩を落とすツムグであった。
それは、魔理沙の発言が事実であり、

「バレたか、となると」

ツムグが服に手をかけ、パージした。
き、で始まる悲鳴をあげ、

「な、何故全裸に？」

東風谷早苗が問うたが、意味のない問だと私と魔理沙は視線を合して頷き、同意を得た。

「逃さないぜ？　咲夜！
「時よ止まれ！」

時の狭間で私は驚いた。

ツムグは既に境内の隅まで移動していた。
逃げ足だけは一流ね。

ツムグを運び、私の座っていた椅子に座らせた。

「そして時は動き出す」

博麗靈夢は佇んでいた。

全裸で椅子に座るバカの前に、紅茶とケーキを持つて。

「全く、迷惑をかけるんじゃないわよ」

それは、夢で聞いた声と同じ口調であり、夢と同じで全裸であった。見知らぬベッドの上で身を起こし、その横で佇む靈夢。

「いじは?」

「私の血代」

答えたのは幽香であった。

靈夢の背中に見えるものは、霧雨魔理沙、風見幽香、八雲紫、八雲藍、橙、射命丸文、パチュリー・ノーレッジだ。

射命丸文は写真を撮り続け、魔理沙、紫、藍、橙とパチュリーはお茶を飲んでいた。

各自、服が汚れたり、ボロボロになっていたが、気にする様子はなかつた。

ところで、と前置きをして。

「これから、私の神社で宴会だから、買い出しが、料理と、配膳と、関係者集め。よろしくね」

夢は終わり、現実が始まる。

配点：（宴会前）

予約投稿です。

第十一章 独壇場の乱れ者（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第十一章 独壇場の乱れ者

ツムグは動いた。

酒、貯蓄は十分か？ 奴らは底なしだ。

食料、大量に仕入れた。奴らの一部は底なしだ。

探し人は見つかったか？

射命丸文が知らせに行つた。たぶん大丈夫だ。

10人以上の宴会は久しぶりだ。

宴会の匂いを嗅ぎつける亡靈にも気を付けないと、奴は底なしだ。

料理を手伝ってくれる心優しい人物はいなかつた。

皆、非情である。

が、色々と、女同士で話し合うことがあるらしく、そこに男の俺が
関わるわけにもいかず、ただ、料理をひたすら作るだけである。

「ん？」

「お？」

つまみ食いだ。

伊吹萃香が、並ぶ前の料理に手をつけていた。

「話し合いは？」

「終わつたよ。よかつたなあ

つまみ食い進行中。

ついでに自前の酒を飲み。

「俺がその話合いの中身を知る」とは、「知りたいの？」

何故か、顔を朱に染めた萃香。
上田遣いをする。それは身長の違いではなく、何かを求める田だつ
た。
だから、

「やめておこう」「
「それがいいね。しかし、力入れてある料理だねえ。^{りき}いつも以上に、
うまい」

全ての料理を一口喰らい終わつた鬼は満足氣に調理場を去つていつ
た。

仕事が増えたぞ。ちくしょうめ。

宴会には、博麗靈夢、霧雨魔理沙、十六夜咲夜、伊吹萃香、風見幽
香、射命丸文、レミリア・スカーレット、フランドル・スカーレ
ット、パチュリー・ノーレッジ、紅美鈴、ハ雲紫、ハ雲藍、橙とい
つた参加者がおり、自身を含めると、14人もいた。
しかし、料理は14人分ではなく、その倍は用意し、酒はもつと用
意した。

大宴会用の広い部屋を使い、宴会はスタートした。

序盤戦。

まず、初めに出した食料がなくなつた。

「そんな、バカな」

追加分を作り続けた。

中盤戦その1。

料理と酒がなくなつた。

「手加減といつもの知らんのか」

中盤戦その2。

さらに追加料理と酒。

「遠慮といつもの知らんのか」

中盤戦その3。

「外道達め！」

終盤戦その1。

魔理沙が吐いた。

「ほけえ。お酒は使用方法と、容量を守つてお楽しみくださいー。」

終盤戦その2

半数が倒れるように寝ていた。

「ここで、数人が寝ゲロしたら悲劇だな」

終盤戦その3

「生き残ったのはこれだけか」

伊吹萃香、八雲紫、レミコア・スカーレット、風見幽香、博麗靈夢は生き残っていた。

「ワインでシメか、その身体のどこにアレだけ入った？ そこの鬼、テメーもだ！ 僕の食い物まで食つなよ！」

「いいじゃんかよー」

がははと笑い転げていた。

酔っ払いである。

寝ている奴は隅に並べて布団を掛けたおいた。

「さて」

そう言つて立ち上がったのは八雲紫で、

「私は帰るわ」

そう言つて、スキマに腰と橙を落として、頭だけ出した状態で続ける。

「楽しかったわ。色々と。じゃあね」

返事を返す前にスキマが閉じた。

「やー、レミリア寝よつねー」

座り寝していたレミリアを隅に運び、フランの横に寝かせた。

残りはアル中鬼と、幽香と靈夢だ。

「お開きには良い時間だな。さあ、寝ろ。今寝ろ」

「寝るにしても、ねえ？」

幽香は、萃香と靈夢を見て、一人はアルコールで赤くなつた顔を更に赤くした。

「ま、別室でやりましょう」

3人の女と1人の男。

全員が服を着ていなかつた。

胸の薄い人物は、獣猛に、激しく、腰を振り、愉悦した笑みで犯し続けていた。

巫女服を來ていた人物は男の顔に自分の秘所を押し付け、その後ろに花を象徴する人物があり、巫女の胸を揉んでいた。

鬼は満足して横たわり、代わりに巫女が跨り、散らした。

花は巫女の代わりに顔に跨り、巫女の胸と秘所の弱い所を責め、嗤う。

鬼は、巫女の尻をなで、その先の門を刺激する。

巫女の口は花が塞ぎ、両胸は揉まれ、尻も撫で回され、快樂に浸かつっていた。

巫女は数回目の痙攣と共に力が抜けて、そのまま寝てしまつ。

しかし、鬼と花は止まる事なく、犯し続ける。

鬼と花の口で一つの物を舐め、咥え、奉仕した。

鬼の体重は軽く、抱え上げられて、突かれた。

花は跨り、激しく上下した。

限界を示した男に、鬼と花は嗤つ。

2人は男の感じる所を責める。

結局、泣こうが喚こうが、2人が満足するまで、続けられた。

全員が動き始めたのは昼頃である。

日の光に弱いスカーレット姉妹は室内におり、そのメイドと門番も同じ部屋にいた。

一足早く、パチュリー・ノーレッジは帰宅。

それに付いて行くように魔理沙も紅魔館の方へ飛んでいった。
射命丸文は今回の出来事をまとめて新聞にするために一時帰宅。
萃香と幽香は昼飯を食べた後、どこかに消えた。

たぶん、帰ったのだろう。

靈夢と俺は宴会の片付けをし、顔を合わせると靈夢の方が気恥ずかしそうに笑っていた。

「いつまでも気にしてちゃ駄目ね」

それだけ行つて消費した酒と食材を購入しに入里に向かつた。
日常が戻る。

「疲れた」

ふうと息を付いて腰を叩く。

「まるで、おじこちやんですね」

紅美鈴がいた。

聞くと、スカーレット姉妹は日が強いので奥で寝てしまい、咲夜は

着替えを取りに紅魔館へ戻つたらしい。

つまりは、この神社に今、俺と美鈴しかいないことになる。珍しいこともあるものだ。

これはひょっとしてチャンスでは？

気を探ると彼と私以外の人の気配がなかつた。

「疲れてるなら、寝転がつて下さい。気を使ったマッサージしてあげますよ。昨日のお礼とかお嬢様してませんから

「ん、頼むわ」

訓練の後にマッサージをする事があり、ツムグは気持ち好さを知っているし、疲れが取れるのも知っている。

しかし、昨日の夜、たまたま、起きてトイレに行く途中に見てしまつたのだ。

昨日から疼いてしおうがなかつた。

ツムグが悪いと自ら完結し、この疼きを解消してもらつことにした。

背中に乗り、首、肩、背中の頸に揉みほぐし、気を通す。

「あ～。効く～」

焦らない。

身体を下げる、腰回り、お尻、太もも、ふくらはぎとオヘマッサー

「アレ、ここも硬くなつてますねえ？」

氣は流れ、精力を増幅させる。

2人の男女がいる。

男は仰向けに寝転がり、女は、男の足の間に入り、手と、口を上下に動かしていた。

早々と、果て、出された種は飲み込まれた。

そして、女は寝転がり、十分に準備のできた証を見せる。

ゆっくりとした出し入れで、痛みは薄く、しかし、その締め付けは誰よりも強く、男は直ぐに果ててしまう。

しかし、男のモノは硬いままであり、動きは止まらなかつた。

室内には肉と水がぶつかり合う音が響き続ける。

女は痙攣し、果てる。

それと同時に男も痙攣し果てた。

だが、男は萎えることを知らず。

行為は続いた。

女は座つた状態で抱きつき、そのまま、続きを始めた。

突き上げられるモノと胸の刺激で顔が緩くなる。

濃厚な口の絡みがあり、互いに求め合つた。

そして至る。

寝転がつたのは男の方で、跨る女は恥じらつた。

それは男に取つて、珍しい光景で、思い切り、突き上げた。

肉と水がぶつかり合つ音が一層響き、女は乱れる。

倦怠感の中男は女の後に周り、一気に付いた。

それは女にとつては羞恥心を駆り立てるもので、男をますます激しくさせるだけであつた。

そのまま、直ぐに果てた女を抱え、部屋にあつた鏡に繋がりの部分を見せつける。

恥ずかしげる女をいじめる様に、囁き、また、突く。水浸しの秘所はまた、溢れ出す水で余計に湿りを『え、快樂に溺れる男女。

胸で喜ばせ、口で奉仕し、また、女と男は繋がり合つ。最後に、お互い口付けを交わし、至つた。

日が傾き、宵闇が訪れる。

紅魔館のメンバーは帰宅した。

中でも中国と呼ばれることがある人物は実に満足気であった。

「夜は軽めで胃に優しいもので」

「はい……。飲み過ぎですね。わかります」

味噌汁と、漬物に惣菜、茹でた鶏肉に調味料を敢えたものをしておいた。

翌日の文々。新聞に事件の真相はハ雲紫率いた愉快犯といつタイトルであった。

内容は語るに落ちる。

「結局、ツムグはある意味良い思いしただけじゃないんですか？」

射命丸文と俺は神社で何故か二人きりであった。

靈夢は魔理沙の所に遊びに行くといつて出ていき、俺に境内の掃除を押し付けたのだ。

一息ついた所で、文が新聞を持って来たのだ。

「何を言ひつ。俺は巻き込まれ事故に会つたのだよ」

ふーん。と文は興味なさげであった。

胡座あぐいじをかけていた所に急に文が入り込むように座り込んできた。

「でえ。私も、そういう事に興味津々だつたりしてえ～」

なんか猫なで声でムカツイた。

が、急にこちらを向き、潤んだ瞳で、唇を奪われたのだ。

胡座あぐいじの中、女は確かに熱くなつたものを己の尻に感じていた。
その状態で、口を交わし、胸で楽しませていた。
女は男の手を取り、自分の秘所に潜り込ませ、手を合わせたまま、
擦らせる。

それは、快感であり、恥らいでもあつた。

だが、性感の方が徐々に強くなり、自ら男の物を向かい入れ、自分
の中の一一番奥まで届かせる。

若干の痛みと、痺れ。

そして、男の持つ、能力を強ねだ請る。

全身に性感が走り、数回の動きで至る。

男は能力を止めることなく、繋がつたまま器用に体勢をえて、向
かい合つように座り、両手で胸を犯す。

突き上げられる事に強烈な性感が走り、鳴く。

痺撃が続き、その間も突き上げられ続け、呆氣無く、至る。

そして、懇願する。

しかし、突き上げる行為は激しさを増すばかりで、ついには、性感

の波に飲まれ、漏らしてしまつ。

気を失いかけた所で、能力を止められ、意識を保つ。

女を寝転がせ、男は突く。

強く、速く、激しく。

奥に当てるように動く。

そのたびに、喘ぎ、鳴く。

数回の痙攣後、女は満足気に氣を失つてしまつ。

不名誉にも女はお漏らしの称号を得た。

昼過ぎ、珍しく、十六夜咲夜が一人で博麗神社に訪れた。

「ん？ 忘れ物か？」

「え？ ええ、まあ、そんな所です。ハイ」

拳動不審なメイド長である。

チラチラとこちらを見ては、髪型を気にしたり、服を気にしていた。

どうしたものかと迷つた末。

「時よ止まれ！」

ヤケクソ氣味に時を止め、彼の唇を奪い、元の位置に戻り、

「そして時は動き出す」

ふう、と一息ついた。

「今、何かした?」

ビクリと肩が震えたが、笑みを保ち、

「いえ、忘れ物が見つかったので帰ります。ではー。」

逃げるよひに飛んだ。

うう~。無理ですよ。

関係者は彼を犯す権利があるとか何考えてるんですか!
破廉恥です!

現実は始まり、巡る。

配置：（宴会後）

第十一章 境界線上の幻想郷（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

現実と幻の狭間。

そこに境界線があるのならば、幻想郷は境界線上に存在する。

境界線、現実側に傾けば幻は消える。境界線、幻側に傾けば現実が消える。

人間が消えれば、数多くの妖怪が消える。妖怪が消えても人間は消えない。

だからその境界線上に存在することで、幻想を保つ。

ハ雲紫は続ける。

幻想郷を保つ事を。

人間と妖怪の共存を。

寿命すら無い。

一人一種の妖怪である。

それが、悲しいとも、嬉しいとも思わなかつた。

一人の人間は言った。

一人で生きるのは辛い。仲間がいるのは悲しい。頼れる仲間をつくろう。

力のない人間は言う。

頼りないかもしれないが、頼れる奴らは多くいる。もし、何かあつた時は俺を頼れ。俺が頼れる奴らを皆集めて、なんとかするから。

あの時の私は何を感じ、何を思ったのか。

鬱蒼と生い茂る森の中。

二人の男女がいた。

1人は魔法使いの格好で木に両手を添えていた。

男は魔法使いの臀部に両手を添えて、腰をぶつけていた。魔法使いの下半身は何も付けておらず、片足に下着があつた。激しく肉と水がぶつかり合い、森の中に音が響いていた。魔法使いは喘ぎながらもそれは艶のある声であった。

三度目となる種が注ぎ込まれ、魔法使いは満足気に男の物をきれいにするため口を使った。

そのまま、頭が激しく動き口の中に注がれる。それを飲み込み。

地面に座った男に跨り、腰を上下させる。

服の下から手が入り、胸を犯されながら秘所がきつく締まる。お互いに痙攣し、満足した様子で唇を重ね合つて行為は終わる。

魔法の森でキノコ狩りである。
何故かと言つと、元凶は霧雨魔理沙であった。

「修行するぜ！ 付き合え！」

拉致同然であった。

どうも、最近の弾幕、じつにで良い成績を残せていないので修行するらしい。

その修行の為に、キノコ狩りをしながら現れる妖怪を圧倒的なパワ

一で倒して行つた。

そろそろアリスの洋館に付いてしまつが、そこが目的地なのだろうか？

アリス・マーガトロイドには、苦い思い出がある。

全裸ネタの際、人形に刺されそうになった。

割りと本気の目をしており、その後、何故かアリスの洋服を着させられた。

女装であつた。

腰回りがぴつたりだつたので、怒られた。

理不尽である。

アリスの洋館には主がおらず、不法侵入対策の魔法と扉に門番として人形がいた。

「留守か。弾幕ごっこしようと思つたのに。残念だぜ」

運が良かつたな。アリス。お前は助かつたぞ。

「な、何をするだアー」

ピチューーン。

森近霖之助は突如の霧雨魔理沙の訪問と、いきなりの弾幕ごっこでの犠牲になつたのだ。

「うーわー、やーらーれーたー」

棒読みであった。

河城にとりは霧雨魔理沙の犠牲になつたが、それは擬態であり被害を最小に抑える好手であった。

ハ雲藍と霧雨魔理沙。

当然の如くと言つたら失礼だらうが、負けたのは魔理沙であった。通り魔のように弾幕ごっこを仕掛けて勝利を築き上げてきたが、それもついに終わりを迎えたのである。

それを見ていただけの俺。

魔理沙は力の供給無しでここまで来たのだ。

俺としては付き添わなくてもいいんじやないかと思つていたのだが、魔理沙が帽子で顔を隠すように深くかぶり、

「いいじゃないか。い、一緒に行こうぜ？」

と、手を差し出してきたので思わず握つたのだ。

荷物持ちや、食料を料理にする作業は俺で、魔理沙は修行と新しい技の開発ばかりで女の子らしいことはあまりしていなかつた。

しかしながら、ここ最近の魔理沙は一生懸命に努力していると思つ。理由は魔理沙が言つまでは聞くつもりはない。

聞いても答えないとさうし、自分で決めたことに他人が口出しするのもいかんと思う。

とりあえず、今は倒された魔理沙に力を供給しておこう。

「ねえ、寝てるこの娘、犯さない？」

八雲紫は霧雨魔理沙が寝ている布団を指さし微笑んできた。

男はスカートを履いている魔法使い下半身に頭から潜り込み、秘所である箇所を刺激する。

胡散臭い妖怪は、魔法使いがとっくに起きていることに気付いていたが、黙っていたほうが面白いと思い男に激しくするように要求した。

それに答え、下着をずらし舌と指を使い弱い所を丁寧に攻めた。蜜が溢れ出してくる。

丁寧な愛撫から激しいモノに変わり魔法使いが痙攣した。魔法使いは起きるに起きられず、ひたすら声を潜めた。

妖怪は魔法使いの胸を服越しに犯す。

その上で、ゆっくりと、服を脱がせ、露わになる肌に舌を這わせて、魔法使いの反応を楽しむのであった。

ついに我慢できなくなつた魔法使いは抵抗するよつて妖怪の胸で遊び、片手は、妖怪の下半身を刺激していた。

魔法使いと妖怪は同性であるが、お互いに口を犯しあつていた。

それは、どちらが、先に弱音を吐くかの維持の貼り合いであり心の戦いであった。

心が折れたのは魔法使いであり、それは男の挿入がきっかけであった。

だらしなく涎を垂らす顔を楽しみながらも、妖怪は胸を犯し、更には腹や、脇、脚など、至る所を舌で巡回した。

不意に男が魔法使いから妖怪へ切り替え、立場は逆転した。

魔法使いの上に妖怪が重なり合う形であり、下からの魔法使いの責

と、後ろからの男の突きで、呆氣無く妖怪は果てる。

二人の重なりあう秘所の間に挟むように熱くなつた物を上下に動かし、二人を樂しませる。

二人はお互いの胸で遊び合い、口で結び合い、秘所を強く押し付け合ひことで、強い性感を楽しんで、至る。

八雲藍は料理をしていたのだが、後ろから感じる性感にその手を止めていた。

裸の上に割烹着だけを付ける格好を強要され、その先に何が待ち構えているかも理解していたが、己の欲に勝てず、許してしまつた。後ろから眺められ、ゆっくりと臀部を撫でられ、それでも初めの内は料理をしていたのだが、指が動き、押し付けられる熱いものに手が止まり、唇を交わした時に料理を諦めた。

立つたまま起用に、入つてくるモノに興奮を覚え、羞恥心も感じたが、身体はソレを求めていた。

尻尾の付け根を優しく扱かれ、想像以上の性感を与えられた。鳴くように声が漏れる。

塞ぐように唇が蹂躪され、片手は尻尾、片手は胸で遊んでいた。至る、その寸前に、動きが止まる。

性感の波が頂点辺りで搖らぎ、切なくなる。だが、彼は意地悪に囁き我慢を要求してきた。

性感の波が收まり、また、動きが来る。

今度は片手は胸で片手は秘所の弱い所であり、我慢させられたので、すぐに性感の波が頂点付近まで上がる。しかし、繰り返す。

執拗に、達する寸前で行為を止め、動き、また止まる。

こちらが、お願いすることで、動きは激しくなり、今までに無い程の性感の波が頂点を軽く越え、至る。

激しく身体が痙攣し、膝を付いてしまつ。

満足感に浸る暇もなく、敏感なまま腰を掴まれ激しく後ろから突かれた。

肉と水の音が激しく響き、すぐに達してしまつた。

魔理沙の修行は終わり、奇襲を受けた関係者のフォローに回り終えて。

さて、博麗神社に戻ろうと空を飛んでいた俺を見つけたのは、珍しく真剣な表情をした射命丸文だった。

「何をやつてるんですか！ こんな所で！」

悲鳴にも近い声を俺に向けた。

それは、この先にある出来事の重大さを気付かせるものであり、また、俺の身を必要とする緊急事態であると感じた。

「神社が、博麗神社が倒壊しました！ それに、靈夢さんが」

博麗神社を倒壊させる程の大地震は幻想郷に大きな合図を鳴らす事になつた。

そして、それは多くの者を巻き込んでゆくことになる。

幻想郷を愛する八雲紫。

彼女が本気で感情を見せた出来事である。

もう一人、誰に対しても怒らなかつた人物が初めて怒る出来事でもあり、多くの幻想は恐怖することになつた。

「美しく残酷にこの大地から往ね！」

目を吊り上げ、口は鋭く、視線は強い。
天を指差し、叫んだのは八雲紫。

「全力でぶつ倒す！」

目を見開き、口元は力強く、視線は相手を見透かすように。
天を指差し、全裸で叫んだのは 。

指差す先方に何が待つのか

配点：（天）

第十一章 境界線上の幻想郷（後書き）

一部完。まさか一部完まで毎日更新するとは思いませんでした。

一週間の間を開けて再開します。

外伝を書くかもしれません。

今後もギリギリエロを続けていきます。

閑話01（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

紅美鈴の掛け合い。

「はつ！」

「おうふつ」

紅美鈴の身体が俺の身体に触れて、飛ぶ。
寸勁だ。

おおよそ、人間の武術という物を全て取得しているという紅美鈴に、
武術を習うという暴挙にでていた。

実体験でその効果を知る。

中国武術恐るべし。

組手で、揺れる胸、覗く脚。時たま、パンチラ。

「邪念です」

手首を持たれ、次の瞬間には背は地面にあり、衝撃が身体を襲った。

「ぐふう、あ、合氣まで使えるのか」

「よく、わかりますねー。ま、使えない武術の方が少ないですよ」

地面に仰向け状態の俺に、立ったままの美鈴。

顔の位置は、美鈴の足元であり、視線の先には男の理想郷がつ！

「あぶねつ！ 顔面に踏みつけとか、死ぬからー！」

「エッチなのは良くないですよー！」

転がり逃げた。

立ち上がり、構える。

「お、天地上下の構えですねー」

右腕を上に、左腕を下に身体の前に構えてある。どちらの腕が上で、どちらの腕が下という決まりはなく、自分の好きな方で良い。

構えの意味がバレたので、変更。足を大きく開いて腰を深く落とす、美鈴に対しても壁を作るような構えを取る。

虚刀流一の構え：『鈴蘭』である。

もちろん、虚刀流は使えない。

「ん？ その構えは知りませんねー」

左足は前に出して爪先を正面に向け、右足は後ろに引いて爪先は右に開き、右手を上に左手を下に置く。

地面に足を生やすようにがっちりと構え、地面を踏み込み、腰を捻り、掌底を突き出す。

「発想は面白いんですけど、私には通じませんよ」

軽く避けられ、反撃として、掌底を突き出した腕を取られ、投げられた。

所謂、一本背負いだ。

「投げられてばっかじゃね？」

「まあ、胸ばかり狙つてくるからですよ。とにかくの構えは

？」

見よう見ま似で、虚刀流一の構え：『鈴蘭』の構えを見せる美鈴。説明しようにも、刀語を話しても意味が無いので、

「体術で刀を持った相手にする武術？」

「なんで、疑問形なんですか？ また、アニメとかいう奴の技ですか？」

小説です。といっても、アニメの技とか教えて原理を理解してしまっており、美鈴は天才なのだ。

体術だけは。

虚刀流の説明をしたが、やはり、というか、俺自身が、曖昧であったために、

「対剣術の技としては使えますけど、弾幕ごじーににおいては役立たずですね。いやー、残念だ」

美鈴は虚刀流を独自の解釈で取得した。

組手の後、ダメージを抜く為にマッサージをする。

「あつ、もうちょっと強めで
「ん

紅魔館にある、美鈴の自室だ。

俺の方はマッサージは済んでおり、今は美鈴の方をマッサージして

い。

うつ伏せに寝ている美鈴の上に乗り、強めの力で押す。

「お～、良い感じですよ～。ぐう～」

寝た。超スピードとかじやないもつと恐ろしい片鱗を味わった。ゆっくりと服を脱がし、下着を眺める。

お尻の張り具合と、引き締まつた脚に、細い腰。絶景である。

上着を脱がすことほできなかつたが、横乳を揉める所までは頑張つた。

「ミラションクリア、指示を頼む。何？ 下着を脱がせと？」

独り言である。健全なSNSに不適切な指示だ。だが、やる。

ソロリと下着に手をかけ、足の方へ移動させていく。お尻の割れ目がだんだんと、顕になりあと少しで全てが揉めるという所で、

「は～、あ～、なにしてるんですか？！」

目覚めた美鈴。

下着を元の位置に戻し、

『落花狼藉』

足を斧刀に見立て、全体重を乗せ、加速させた前方三回転かかと落としが決まる。

床を抜け、着替えをしていた十六夜咲夜に追撃を喰らつうことになつた。

紅美鈴の話

配点：（非口）

第十三章 部外の裸の王様（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第十三章 部外の裸の王様

ハ雲紫と男がいる。

「ダメッ、そんな激しく責めちゃダメえええ

「王手！」

将棋である。

「入つてきちゃうつう。いつちやらめええ

パチっと、王手を交わす動きであった。

「らめえええ、いつちやうのおおお

詰んだ。俺の勝利であつたが、全く嬉しくないのは相手は飛車角落
ちであり、更には手加減され謎の悲鳴を上げながら将棋を打つてい
たからである。

扇子の向こう側、目から下を隠しているが笑つてているのがバレバレ
である。

「では、一枚、服を脱げばいいのね？」

「いつから脱衣将棋になつた？ それと、大丈夫か？」

博麗神社の一角、境内の隅で将棋を打つており眺める先の神社は倒
壊していた。

靈夢の安否は不明であった。優先すべきは博麗神社の結界であり、

それがつい先程に安定した。

一息付いて、お茶をしていたはずが将棋になり、脱衣将棋になりかけた。

射命丸文は河城にとり率いるカツパ達を読んできてもうつメッセンジャーとなり、飛んでいった。

アル中鬼とフーラーマスターは都合悪く、一緒に地下に潜つたまま帰つてきていません。

地下への伝達は魔理沙からパルスイへそろそろ伝わっているはずだ。

そして、表面的な変化を見せないハ雲紫。

「囮暮は、石を動かさないし、将棋も負けた。普通ならあの位で負けやしないだろ。靈夢なら一足先に動いてるさ。だって」

倒壊した神社に力を供給する為に探つたが誰もいなかつた。

俺の能力で分かつてている事は、力の供給であり供給するには色々な条件があるようで、目の見える範囲、相手に意識を向ける、無機物にも供給可能などがわかつてている事だ。

周囲に供給を撒く事もできるので、索敵に応用できる。

供給相手がいた場合、供給先に線のようなものが見えるのだ。

敵がいた場合、相手に有利な供給をしていては、こちらが不利になるので、基本的には回復力をばら撒いて索敵をしている。

この場合、相手が傷を負つていたら恩を押し付けられるし、傷がなければ何も起こらないのである。

「神社の下敷きになつて無いから？」

「ん」

博麗靈夢が動いている以上、自分は動かずに、成長を見守る。と、葛藤するわけがないか。

視線の奥に、確かに炎がある。遮るように言葉を挟んできたのは、やはり悟られたくないのだろう。珍しく感情的になっているのが恥ずかしいと思つてゐるようである。さて、どうしたものか。

不意にハ雲紫の視界が暗くなる。

「なに？」

ツムグという男の胸に顔が埋まつていて。

ハ雲紫は、心の中に渦巻く感情を押さえており、それが露呈する事が気に入らなかつた。

それが、一層に怒りに火をつけ、この事件を起こした人物をどう調理しようか頭の中で幾度も、シミュレー・ションしていた。思考が駆け巡り、いつも調子でなかつた。

その結果、抱擁されるまで気付かなかつたのだ。

全く、隙だらけね。

何故か、心が落ち着き初めて思考がクリアになつていく。能力ね。落ち着く、感情を動かす力の供給までできるのか。この人は一体幾つ隠しているのかしら？

ツムグの能力は基本的に、妖力、靈力、魔力などの供給と本人は言つてゐるが、実のところ、色々な力が供給可能である。それを知つたのは最近だつた。

今も、感情に働きかける力の供給があることを知つたのだ。ツムグは秘密主義ね、と思う。

「理解力、思考力、計算力。それと包容力。包容力って心の余裕とか、まあ、心を広く持たせる効果があるっぽいやつを供給してみた」

それに、と付け加え、

「近いと、効きやすいかも」

包容と抱擁をかけているのかしら?

まあ、悪い気はしないけども、ちょっと恥ずかしいわね。

私の方が何倍も年上なのに。腕の中に入るだけで、落ち着くなんて思いもしなかつた。

初めて合った時など、全裸で私に声を掛けてきたのにな。最近も全裸の時が多いけど。

ん? 殆ど全裸ね。初対面の相手には全裸だもの。それでいいのかしら?

八雲紫とツムグの邂逅は必定であった。

偶然か、必然か、ツムグは八雲紫の自宅に訪れた人間であり、通常、見つからないようにできている自宅に訪問者が来るということは、能力持ちか、高い靈力、妖力を持った人物であることが想像できる。また、自宅周辺に入ると八雲紫、八雲藍などにわかるように仕組まれており対応は八雲藍が行う。

訪れた人物を八雲紫の式神である八雲藍が確認。

そして、珍しく慌てた様子であり、珍しく八雲紫は唇前に起きていった。

「全裸です」

「はあ？」

訪れた人物の特徴を聞いた回答であった。

妖怪に物取りにあつたのかと思い、家に招き入れ話を聞くとどうやら旅をしており、ここには偶然辿りついたようであった。全裸である意味はなく、服はいつの間にか着ていた。

彼の後ろから現れた十六夜咲夜が、

「休暇です。ええ、休暇ですとも。決して、面倒事を押し付けられたわけではなく、休暇を利用した旅行です」

含みがある言い方であった。

弱みでも握られているのだろう。そそこの実力者でメイド長である十六夜咲夜を紅魔館から連れ出した人物に興味が湧いた。

「何故、全裸だったのですか？」

八雲藍は問う。

「趣味？」

疑問形で答えるツムグ。

「そんな趣味がありますか、私に対する嫌がらせですか？」

保護者？ かどうかわからないが、監督責任の自覚のある十六夜咲夜が苦情を述べた。

「非武装アピールである。これ以上ない非武装。無抵抗主義の主張」

堂々と胸を張つて宣言していたが、十六夜咲夜は苦悩の顔をしていた。

「それに、幻想郷に、話の通じない妖怪は多いけど、話せばわかる奴も多い。もちろん、聞く耳持たず襲つてくる奴もいるけど、その時は助けてねつ！ 僕、戦闘能力ないから」

「変わった人間だ。

ひととなり
「為人について分かつことがある。

バカだ。

妖怪に対してスペルカードで相対という手段が確立しているのに、戦う能力がなく他人に助けてもらう前提で、非武装を主張するなど一人の時に襲つてくれと言つていいようなものだ。
折角の能力持ちなのに、食われて死ぬわね。

「まともなスペルカードが一枚しか無い癖に、よく威張りやがりますね」

「最近、メイドに棘がある。これは気のせいだろう。俺に嫉妬して

るな」

スペルカードは持つてているようだ。

ならば、弾幕ごっこできるのではないか？

「スペルカードへタだからなあ。予備がない。使う機会もない」

「スペルカード作成に靈夢の力を借りてやつと完成できる？ はは、どうやって今まで生きてきたの？」

「それは、もちろん

「他人の力で」

協力する見返りに、と言わんばかりに得るものがある。
力を分け与える程度の能力か。

「靈力、妖力、魔力、全て取り揃えています」

なるほどね。

ツムグが付いていれば、消費を気にすることなく力を使えるということか。

試しに藍に妖力を供給してもらつたら、

「すごいです！ ほら、尻尾の毛先まで妖力で満たして、艶々です。
力が溢れますよー！」

狐火が鬱陶しい。

九尾の尾が震え、十本目が顯現の予兆を示したので止めた。
百年掛けて一本じやなかつたかしら？

余計に供給された分は、幻想郷が美味しく頂きました。

幻想郷維持が楽ね。

しかし、悪用されたら相当厄介ね。

それをわかっているのか、わかつていないので、見極めて、わかつていなかつたら処分しなければならない。

幾つかの質問と行動を見聞きした結果、彼は幻想郷を愛していることがわかつた。

おそらく私と同じ。

幻想郷の生みの親として嬉しいと感じた。

彼の馬鹿らしい優しさと、幻想郷に対する愛情は随一を誇るだろう。バカをやっているが、自分のやれる事と相手を見る選択眼はある。だから、

「頼りないかもしれないが、頼れる奴らは多くいる。もし、何かあつた時は俺を頼れ。俺が頼れる奴らを皆集めて、なんとかするから

私に言うのだろう。

天に想うのは何か？

配点：（回想）

第十三章 部外の裸の王様（後書き）

閑話で登場させて欲しい人物がいたら感想に書きijんで下さい。

なお、必ずリクエストされたキャラが登場するとは限りませんので
ご了承ください。

閑話 02（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

伊吹萃香の場合

頭に一本の角を生やし、外見的には口リである鬼。

伊吹萃香は思う。

この人間は女で、互いに認められさえすれば、欲望に正直だと思う。

自分の格好を客観的に見るのならば少女と言つのが普通だ。

私みたいな娘にこんな事をさせるなんて、幼女趣味？

口内で舌を動かし、一番敏感な先の方や頭のほうを撫でるように舌を回す。

手は上下に動かし、一方で、男の弱点の入れ物を刺激する。

口内は熱く、唾液が溢れ、水音を響かせる。

男の顔を見ながら顔を上下に動かしたり、頬張るように、遊ぶと、男の表情が緩む。

限界を示す言葉を発したが、達することを我慢させる。

すでに準備が整っている私の秘所に導き、一番奥まで届かせる。

強めに締め付けるのが性感である。それは、相手の男にとつては、刺激が強く、こちらが満足する前に注ぎ込まれた。

だが、男は連続で上下に動き、こちらを喜ばせる。

激しく奥を突かれ至る。

抜かれたものを綺麗にするため舐める。

さらに、刺激して、再び熱さを取り戻させて、今度は口の中で果てさせる。

それを、飲み込むと、口の中から男の香りが漂い、そのまま酒を呑むと非常に気持ち良くて酔つのだ。

男はソレを、変態と言うが、私は男に口リコンと言つ。

男の顔の横には生脚があつた。

それは太腿である。

首には暖かさ、頭には心地の良い重さが。

伊吹萃香を肩車していた。

それも、人里で。

単なる買い物であるのだが萃香が付いてきた。
罪という被り物をした人間は、

「くそつ！ 何と言うことだ！」

「ロリコンめ！ うらやまけしからん！」

「俺はさあ、萃香ちゃんつて合法ロリだと思うんだよ。ああ見えて
も年 。誰だ！ くあ wせ d r f t g yふじこ】」

訳のわからない事を叫んでいた。

「アレ買つて～」

「駄目だ」

萃香は欲しい物を頭の上から指さして強請るのだ。

「あ、アレもうまそうだ～」

おいやめろ。そんな目で見るんじゃない。

俺はロリコンじゃないぞ。

商人の目は犯罪者を見る目であった。

結局、幾つか食べ物を買い与えて大人しくしてもらつた。
食べ渉が頭に付いていた。

酔っ払いめ！

頭の汚れと時間も都合が良かつたため風呂に入る。

「おう。入るよ」

「つて入つて来てるー。」の酔っ払いが！

返事も返す暇なく侵入された。

つるべだった。

身体を洗い、風呂に浸かる。

直視することはなかつた。なかつた。

「ほひ、生えてないだろ？ これでも数百歳なんだよ？ アハハ

一筋の線があつた。

「角つてどうなつてんの？」

鬼の人体構造に興味が湧いた。

角の根元を見る。

骨？

よくわからん。

「あんつ。くすぐつたい

神経通つてゐのか？

擦つたり、撫で回した。

「んつ。もうう

顔が近づき、唇を奪われた。

どうやら、くすぐったいものが感じるものに変化して堪らなくなつたらしい。

その後、風呂場で行為があり更に夕飯後も襲われた。
今回の事で学んだのは、鬼の角を安易に触つてはいけないという事だ。

翌日、疲れた男と綺麗な少女が見かけられた。

伊吹萃香の話
配点：（H口鬼）

閑話〇三（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。

原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

投稿し始めて15日で10万PV突破！
感謝！その内何か投稿いたします。

紅美鈴、暁に燃える。

激しくキャラ崩壊、設定の崩壊などを含みます。閲覧には注意が必要です。

原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。以上を踏まえた上でお読みください。

事の始まりとなる原因はソムグであった。

あるDVDボックスが香霖堂で発見された。

都合の良いことにDVD再生のできる機械とそれを見る為の機材が揃つており、紅魔館にてパチュリー・ノーレッジ監修のスクリーン上映まで漕ぎ着けた。

スクリーン上映された作品のタイトルは、

【機動武闘伝Gガンダム】

であった。

地下。

旧地獄街道と呼ばれる街道に仁王立ちしているのは星熊勇儀であつ

た。

「暇潰しに戦つてくんね？」

一足先に星熊勇儀の元に辿り付いていたのはツムグであり、幻想郷各地で肉弾戦が得意な相手に同じような内容の言葉をかけていた。

「あんたが自身がやううつてか？」

「いや、俺じゃないよ。戦えねーし弾幕じこも強くないの知ってるだろ」

声をかける相手の受け答えは殆ど同じであつた事にほんのり戦慄しながら対戦相手の事を話した。

紅美鈴がちょっと頭がおかしくなつているからなんとかして欲しい。簡単に病状を説明した。

「ま、いいけど。本人はどこにいるんだい？」

「妹紅辺りと戦つてんじゃね？ 永遠亭に向かううつて言つてたし」

「何だつたのかしら？」

「さあ？ 私達の喧嘩を止めに来たといつことはわかつた」

蓬莱山輝夜と藤原妹紅はいつもの通り殺し合いという名の喧嘩をしていたのだが、そこに突如現れた紅美鈴に横槍を入れられた。あの日はマジだつたな。

藤原妹紅は思う。

何故か溢れる鬪氣に身を包み私達にゲンコツをお見舞いして満足そうにして、

『双方、仲良くなー』

それだけ言ってどこかへ飛んでいったのだ。
興が冷めたと私と輝夜は紅美鈴の話をしながら茶をしていた。
殴られ損だつたんじやないか？
まあ、この状況は悪くない。

「東方ファイト！ レディイイイイイ……「オオオオオオオ！」

鬼達の中にツムグの姿がある。戦の開始を告げたのは彼であつた。
その横には伊吹萃香と水橋パルスイが居た。

「妬ましい程に、それでもなお美しいわ」

「これは……。紅美鈴、灯台下暗しだつたなあ」

妬むパルスイと羨ましがる萃香。

美鈴が纏う闘氣は七色に輝き、見る物の目を惹きつける。

一方、星熊勇儀は酒をこぼさず戦うというハンデ戦をしなかつた。
つまり、星熊勇儀に対等に戦えると認められたという事だろうか？

「あ、姉御が、マジだ」

「この戦い、歴史に残るぞ！」

「これは、俺達の入れる世界じゃない……」

見物の鬼の呴きを聞き逃さなかつた。

「星熊勇儀！ 覚悟おおおお！」

「つけ上がるなああああああ！」

腕の先、拳が見えない程の打撃戦。

衝撃波が生まれ、地面が削れる。

ぶつかる闘気が巻き上がり一人は宙に浮き上がるが乱打戦は続いている。

闘気と拳圧が一いつ切りまで届く。それは空気を揺ゆかせる轟音になり、衝撃は破壊力を持つて周囲に駆け巡るのである。

「少しだがりな」

伊吹萃香が見物の鬼達より一步前に進んで、霧散して防御壁を作ったのだ。

見物の邪魔にならない様にしている辺り、気遣いなんかこの戦を見る価値のものがあると認めているのか。

星熊勇儀は嬉しさで囁く。

相手の紅美鈴が纏う闘気は紛れも無く強者が発するものである。闘気を一点に集約させた。

「私のこの手が真っ赤に燃えるう！ 勝利を掴めとお！ 轟き叫ぶ！ 爆熱！ ゴオオオツドオ！ フィンガアアアアア――――――！」

ならば、こちらも妖力を一点に集約させて相対する。合わさる拳。

闘気と妖気がぶつかり合つ。

星熊勇儀の全力全開に紅美鈴が片膝をつく。だが、拳は合わさり合つたままであり、

「何をしている！ 自ら膝をつくなど、勝負を捨てた者のかあ？ 立つてみろお！」

「う、うるさい！ 私はっ、貴女を超えてみせる！」

足を踏ん張り、腰を入れる。

立ち上がった。

「最終ウウウ奥義イイイ！ 石破天驚拳！！」

「見て！ 東方は、紅く燃えているわ！！」
「大火事だな」

爆破後、紅い光に包まれた周囲は火事になつた。
東方というか東だろ。

バルシイ、なに良い感じにまとめて終わらそつとしているんだ？

破壊と再生。

再生の担当は主人公である

配置：（終戦処理）

閑話〇三（後書き）

というわけで、風呂に入る前に確認したらいつの間にか10万PVを超えました。

本来この投稿は明日の予定でしたが、感謝の意味を込めて本日更新。

10万PV達成記念（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

10万PV達成記念

10万PV突破記念

主人公が行く。

その日の朝はいつもと同じであった。
変わり映えのない朝。いつもと同じ風景だ。

「うん。 やるか！」

決意を込めて動き始める物語がある。

これは、一人の男の無謀な挑戦の始まりであった。

博麗靈夢の場合。

顔を合わす。

朝の挨拶をそこそこに、博麗靈夢の胸を正面から両手で駆掴みにした。

「！ 何すんのよー！」

鋭い前蹴りが腹部を襲う。

「あふうん！」

肉体ダメージ + 10

霧雨魔理沙の場合。

出会い頭の事である。

挨拶もそこそこ、霧雨魔理沙の胸を正面から両手で鷲掴みにした。

「覚悟はできるな？」

顔を朱に染めて、箸で殴られた。

「あふうん！」

肉体ダメージ + 10

パンチラ + 1

ルーミアの場合。

見つけるのに時間がかかった。

挨拶もそこそこに、ルーミアの胸を正面から両手で鷲掴みにした。

「食べていいい人間なのか〜」

「ノーノ！」

妖精の相手は疲れる。

精神疲労 +10

大妖精こと大ちゃんとチルノの場合。

見つけたのはチルノであつたが付属品に大ちゃんがいた。
挨拶もそこに、大ちゃんとチルノの胸を順番に正面から両手で
驚掴みにした。

「きやー」

「おー」

大ちゃんとチルノの反応である。

なんだか行けないことをした気がした。

反省 +10

紅美鈴の場合。

挨拶もそこそこに、紅美鈴の胸を正面から両手で驚掴みにした。

「！ セクハラですよーー！」

踏み込み、身を低くして爆発的な脚力で身体を跳ね上げ、その先に

腕を伸ばす。

アッパーである。

「あふうん！」

乳力 + 86

中国 - 20

パチュリー・ノーレッジの場合。

挨拶もそこそこに、パチュリー・ノーレッジの胸を正面から両手で
驚掴みにした。

「何かの儀式？ それとも暗示か何かしら？」

クール + 30

非暴力 + 100

十六夜咲夜の場合。

挨拶もそこそこに、十六夜咲夜の胸を正面から両手で驚掴みにした。

「な、な、何をするんですか？！」

背後に回られた。

貴様！ 時を止めたな！

「あふうん！」

オラオラ + 100

レニア・スカーレットの場合。
挨拶もそこそこに、レニア・スカーレットの胸を正面から両手で
驚掴みにした。

「ぎゃあーー たーべちやうひーーー！」

腕を噛まれた。

进る何か + 50

カリスマブレイク + 100

フランドール・スカーレットの場合。
挨拶もそこそこに、フランドール・スカーレットの胸を正面から両
手で驚掴みにした。

「？ 今日は何して遊ぶーー？」

何かの遊びの始まりと勘違いされたようだ。

背徳 + 20
反省 + 30

橙の場合。

挨拶もそこそこ、橙の胸を正面から両手で鷺掴みにした。

「二や～ん」

猫である。

ぬこ + 100

ハ雲藍の場合。

挨拶もそこそこ、ハ雲藍の胸を正面から両手で鷺掴みにした。

「わー、何、何？」

隙だらけであった。

狐火で燃えた。

「あふうん！」

尻尾 + 9

ハ雲紫の場合。

挨拶もそこそこ、ハ雲紫の胸を正面から両手で鷺掴みにした。

「何？ 溜まつてゐの？」

これらの意図を理解された上で襲われた。

「あふうん！」

体力 - 20

魂魄妖夢の場合。

挨拶もそこそこに、魂魄妖夢の胸を正面から両手で鷲掴みにした。

「悪即斬！」

「みょん！」

剣撃 + 100

西行寺幽々子の場合。

挨拶もそこそこに、西行寺幽々子の胸を正面から両手で鷲掴みにした。

「あんつー！ もう、悪い子ね？」

笑顔がやばい気がしたので

「あ～ばよ、とつとあん」

逃げた。

巨乳 + 90

亡靈 + 100

アリス・マーガトロイドの場合。

挨拶もそこそこに、アリス・マーガトロイドの胸を正面から両手で
鷺掴みにした。

「どう？ 祈りは済んだかしら？」

人形、上海に追い回された。

「あふうん！」

人形 + 50

伊吹萃香の場合。

挨拶もそこそこに、伊吹萃香の胸を正面から両手で鷺掴みにした。

「んお？ 昼からする気かあ？」

積極的な鬼だ。

「あふうん！」

体力 - 50

リグル・ナイトバグの場合。
挨拶もそこそこに、リグル・ナイトバグの胸を正面から両手で驚撃
みにした。

「蟲つてさ、人を食うのもいるんだよねえ」

蟲師の女の子に恐怖した。

リグルキック！

「あふうん！」

蟲 + 100

キック力 + 100

上白沢慧音の場合。

挨拶もそこそこに、上白沢慧音の胸を正面から両手で驚撃みにした。

「子供でもやらんいたずらだ！」

頭突きを食らつた。

「あふうん！」

C a v e d ! ! !

因幡てゐの場合。

挨拶もそこそこに、因幡てゐの胸を正面から両手で鷲掴みにした。

「はい、一万円」

詐欺うひざめ。

うせぎに囲まれてしまつた。

「あふうん！」

モフモフ + 100

金 - 10000

鈴仙・優曇華院・イナバの場合。

挨拶もそこそこに、鈴仙・優曇華院・イナバの胸を正面から両手で鷲掴みにした。

「さー、師匠にお薬貰つましょひねー」

病んでいると思われた。

「うひんばー！」

狂氣 + 20

八意永琳の場合。

挨拶もそこそこに、八意永琳の胸を正面から両手で鷺掴みにした。

「覚悟を決めてくれましたね？ さあ、お姫様と一緒に楽しみましょつー！」

駄目だ。まだその時期じゃない。

あと、その薬のラベルに媚薬とか思いつきり貼つてあるの見えてるからー！

「えーりん！」

お薬 + 30

藤原妹紅の場合。

挨拶もそこそこに、藤原妹紅の胸を正面から両手で鷺掴みにした。

「美容と健康にはセック

「言わせねえよー！」

もこたん + 20

蓬莱山輝夜の場合。

挨拶もそこそこに、蓬莱山輝夜の胸を正面から両手で鷺掴みにした。

「死ぬまで奪り取つてあげるわ
助けてえーりーん！」

かぐや姫の魅力 - 30
ぐーや + 50

風見幽香の場合。

挨拶もそこそこに、風見幽香の胸を正面から両手で鷲掴みにした。

「きやあーつて、叫べばいいのかしら？」

。。

服を破かれて拘束されて、襲われた。

USC + 100
巨乳 + 89
体力 - 100
自尊心 - 100
精神力 - 100

「アレ？ 私は？」

射命丸文である。

「さあ？ もう終わりだし。まだ見ぬ幻想は沢山いるしきりがない

つてさ」

「えー」

なんだよ。揉めばいいんだな?

射命丸文の胸を正面から両手で鷲掴みにした。

「え? いきなりですね」

ほら、落ちがなかつた。

ノーブラ + 30
スピード + 100

おっぱいを揉む。
ただそれだけさ。

配点: (記念)

誰得番外編

森近霖之助の場合。

挨拶もそこそこに、森近霖之助の胸を正面から両手で鷲掴みにした。

「あつ、駄目だよ。そんな、いきなりなんて」

大変感謝します。

しかし、このような思いつきで始めたＳＳで10万PV達成するとは思いませんでした。

東方キャラが多いので今回はこの辺りで終わりです。

全員だすとなると一体何話になるのか恐怖です。

今後も頑張つて続けて書いて行きますのでよろしく。

追記、読んでも意味ないよ。

このＳＳの構成の話。

12章区切り間隔でストーリーがある、はず。

12章までは八雲家とか博麗神社に関わりが深そうなキャラを出した。

13章以降はバトル多め。工口控えめ。

24章以降はたぶん紅魔館のメンバーか永遠亭のメンバーと絡む。それ以降は何も考えてない。感想などの反応を見て決めると思う。

第十四章 晴天下の蟲師（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

博麗神社復活。

半日程で、博麗神社は元の姿を取り戻した。

カツバと天狗と人間の共同作業である。
人間は予め、これを予期していたのか博麗神社の設計図を起してお
り、ソレをカツバ指示の下、無重力の資材を組み立てる事により、
早々に、復活を遂げた。

一室のみカツバの技術をふんだんに取り込んだ部屋を作り、その持
ち主である人間は、対価としてきゅうりを振舞つた。

天狗の好物は知らなかつたのだが、ネタの提供と食事に何回か呼ぶ
事を対価とした。

そして、夜。

料理場は広くなり、保存食や調味料、その他、料理器具など揃い、
さながら、食堂の料理場のようである。

キツチン改装はにとりまで！

お値段異常、にとり！

「竜宮の使いを捕まえた。肉付きはまあまあ。どうじょうか？」

不法侵入者対策の繩拘束結界が発動し、自称、竜宮の使いを召し捕
つた。

不法侵入の対策は登録制であり、登録されていない人物が勝手に侵
入してくると、繩が侵入者を捉えるようにできており、繩を引き千

切らうとすると余計に絞まるように拘束されるようになつてゐる。博麗神社が倒壊したお陰で、この結界を仕組むことができたのだ。耐震性の強化に、多重防護の結界など、靈夢の許可なしに、八雲紫、八雲藍が付けていたが、いいのだろうか。

耐震性能だけでも、すでに現代日本を超えてゐる。

揺れを感じると、最終的には浮くのだ。

と、仕掛けの増えた博麗神社にホイホイとやつてきて捕まつたのが永江衣玖であつた。

「は、離せ。縄を解け。私は伝言、伝言を伝えに来ただけよ」

永江衣玖の周りには蠢く虫が湧いている。

境内に持ち上げられて移動したのだが、拘束はされているままである。

そして、周りには虫が永江衣玖を囲む様に動いており、中には見たこともない虫もいた。

虫の中には猛毒を持つものや、寄生する虫がいた。

それを操る人物、リグル・ナイトバグ。

蟲の中にはツムグによって、魔改造された特殊な蟲があり、人体の穴から体内に侵入して内臓を食らうという蟲や、妖氣を餌とする蟲が存在する。

リグル・ナイトバグは、本来操れないはずの蟲も操つており、それができるのはツムグによる供給のためであつた。

益虫という虫がいる。

人間と生物の間で利害関係を築ける虫だ。

田植えによるカブトエビであつたり、絹糸の取れるカイコや、蜂蜜の取れるミツバチなどだ。

それらを人里に提供する事で、リグル・ナイトバグは農家の人に

人気がある。

虫の地位向上の相談をした時にツムグが出した提案であり、今では感謝するべき相手である。

その彼が怒っていると私は思う。

蟲を操る程度の能力で、永江衣玖の周りに蟲を待機させている。見た目が気持ち悪い蟲や、ちょっとと暴れん坊な蟲までいる。

「正直に言えよ？ 嘘を付いたら分かる虫とかいるからな？」

それこそ嘘だと思ったが黙つておいつ。

数回の応答で解つたことは、永江衣玖は伝言を伝えにきた使者であり、その内容は簡単でこの神社を倒壊させた相手を一度、懲らしめて欲しいとのことだ。

その相手の名は比那名居天子といつらじい。

常時、ツムグはいつも通りの顔であった。

虫にわえ、

『お前、喋れたりすんの？』

『交尾するならあのへんの茂みがいいんじゃね？』

話しかけては色々としている。

『へラクレスだと？！ オオクワガタと虫相撲させよつー。』

『ホタルかあ、実物を見るのは初めてだ。美しい』

楽しむのはいいのだ。

『リグル改め、蟲師つて呼んでいい？』

丁重に断つた。

記憶の中にある彼の表情と、今の表情は差して変わるものではない。しかし、変化に敏感な虫達は違つようである。

虫の中でも凶暴性の高いカマキリが彼の肩に乗つており、鎌を研ぐような動きをしていた。

また、蜂達は針を出しており、いつでも刺せると示すように彼の周りで飛んでいる。

彼の心情を代弁するような動きが虫達にある。それは、怒りであった。

地下。

旧地獄街道と呼ばれる街道に激震が走る。

発生するのは打撃音であった。

轟音と激音。

ぶつかり合つのは風見幽香と星熊勇儀だ。

星熊勇儀に従つう鬼達はそれを見守る。その中には伊吹萃香がいた。

「酒の肴に^{さかな}戦、見物だねえ」

酒を飲んでいた。

スペルカードなんぞ、じつに遊びだ。

眼前には純粹な妖気のぶつかり合いがある。殴り合つ、殺し合つ。己を賭けた戦いである。

久しく無い戦に鬼達は狂喜した。

対戦者同士は実力が拮抗していたほうが面白い。

『ちよつと地下で喧嘩するから来なさい』

幽香の誘いに乗つてよかつたなあ。

「気に入った！ もつと愉しもつ！ お互ひ駄目になるまでやうう！」

「アハハハ、それ！ 凄くいいわ！」

酒と強者をこよなく愛する鬼と、花を愛する四季のフラワーマスターが互いに囁う。

心臓を目掛けて穿たれる傘。
地面を引裂く破壊力を持つ爪。
互いに交差する。

傘は躲され、爪は地面に爪痕を残す。
互いに当たつていれば相手が即死する程の妖力を込めていた。
地面の爪痕は五本の引裂きを描き、抉れた地表には深さが刻み込まれていた。

人一人が入り込める広さと深さであった。

傘の先。岩があつたが、消えた。

成人男性が両手を広げる程の幅を持ち、高さは人間一人分といった岩であつた。

その岩が瓦解していた。

周囲で見物していた鬼は、引き下がり距離を取る。

巻き込まれては死ぬ！ 鬼達の意見は一致した。

遊び相手は多くいるが、殺し合いの相手は少なかつた。

星熊勇儀は歓喜していた。

己の全てをぶつけても良い相手だ。

遊び相手を地上から連れてくるあの人間の男もなかなかに面白い奴

だった。

眼の前の好敵手はアイツの知り合いと言つではないか！

あの時、地上に返さずいたら色々と面白かったかもしねない。

アイツを求めて強者がわんさか訪れたかもな。

「何笑つてるの？ 殺すわよ？」

「なあに。思い出し笑いさ。ツムグも面白い知り合いが多いな！」

再び地下で轟音が響いた。

「何よ、さつきからつるさいわね。気に入らないわ」

パルパルパル……。

始まりがあれば、終わりがある。
楽しい時間というものは過ぎ去るのが早くていけない。
決着は互いの全力全開の妖力を込めた拳であった。
腕はクロスし、互いの顔に拳が埋まっていた。

「互角かあ。伊吹萃香の名を持つてこの戦い。引き分けとするー！」

「うおおおお。と鬼達が叫ぶ。

虫の知らせというものがある。

予知のようなもので、自分や家族などの親しい者に生命の危険が迫つた際にそれを直感的に知るという現象だ。

人里の上空。

屋根よりも若干高い位置に虫が飛ぶ。

リグル・ナイトバグが行う蟲の知らせである。

これは昼飯時を告げるものである。

特に農業を営む者に取つては遠くにいても時間がわかるのが有り難いものであった。

人里に住む妖怪がいる。

上白沢慧音だ。

彼女の元には手紙を付けた蟲が飛んで来て、その手紙を受け取り蟲を離した。

手紙には博麗神社は復興しており、元の姿を取り戻していると言つ内容と博麗靈夢を見かけたら保護して博麗神社まで連れてくると言う内容が書いてあった。

彼女は了解したと離した蟲に伝えた。

頷くような動きを見せた後、蟲は飛んでいった。

随分、知性のある蟲だなあと思いつ常へ戻る。

たかが虫。 それど蟲。

こと、物量に置いては蟲は他を圧倒することができる。

『敵は天に有り』

虫の伝達力は知れている。だが、この程度の伝言ならば識者に伝えることが可能である。

細切れの紙にたつた一行書かれた文。

遥か昔、明智光秀が使った物を押借したものであった。

「蟲を使うねえ。動かない妖怪の方が多いと思うけど?」

「やれることはやる。使える力は使う。天に向かえば蟲は寒さで使えないからな」

八雲紫はため息をつく。

「それで、今の内にリグルに協力してもらっているわけ? 私一人でも」

口を塞がれた。

女の口を指で塞がないで頂戴。

彼の瞳にあるものは頼つてくれという意思である。
お節介ね。

それでも嬉しいと思える。

そう思えるということは私は変化したと言つことなのだろうか。
それとも元からあつた感情が思い出されたのだろうか。

長く生きた私でも自分の心は分からぬものだと思う。
万が一、私が死ぬようなことがあれば幻想郷は幻想に還る。かえ

それが彼の想像しうる最悪の事態であり、彼が消えても幻想は続く。
その事を彼も私も理解しているから私は複雑な気持ちになるのだろう。

それでも、お征^いきなさい。

「留守頼むわ」

「行つて来なさい」

自覺と覺悟
配置：（主人公）

第十五章 天の愚か者（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第十五章 天の愚か者

「咲夜！ 咲夜はいる？」

レミリア・スカーレットの叫び声が紅魔館に響く。
叫び声に何事か、とレミリア・スカーレットの元に十六夜咲夜と紅
美鈴が馳せ参じた。

「なんでしょう？ お嬢様？」

「いやー、門まで聞こえたから飛んで来たわけですけど。私は戻り
ましょーか？」

「いえ、美鈴も聞きなさい」

背筋を伸ばして座るレミリア・スカーレットの視線は強く、普段よ
りも一層響く声で発言した。

「ツムグを引っ捕えてきなさい」

は？ と聞き返す前に続けて、

「生きたまま私の元に連れてくるの！ これは命令よ！ わかつた
ら早く行く！」

怒声にも近い叫び声に震える十六夜咲夜と紅美鈴。
二人は戦慄に似た感情に支配された。
さすが吸血鬼で、己が主と認める人物だ。
しかし、疑問が残る。

だが、それを聞ける勇気はなかつた。

二人が部屋を飛び出して行くのを眺めていた。
フランには知らせない方がいいわね。

「どうしたの？ レミィ。貴方にしては珍しく大声をだしていたけど。ああ、フランなら昼寝中よ」

聞きたい事を先に答えてくれる友人。

「パチエ。そうね。貴方になら、いいえ、誰かに聞いて貰わないと私がどうにかなりそうだわ」

パチュリーは疑問を浮かべた顔だったが、その目は真摯なものでありこちらの心情を察したものであると感じられた。

「ツムグの運命が見えたわ」

それは、

「青い髪の女に剣を刺される運命よ」

十六夜咲夜は記憶を辿っていた。

しかし、主であるレミリア・スカーレットがあれ程感情を出して叫んだ事など記憶になかった。

それ故に、疑問に思つていた。

ツムグに何か起るのでは？

生かして捕らえてこいとの命令だ。

つまり、生命に関する危機が訪れようとしているのではないかと予測する。

だから生きたまま連れてこいと言つたのだ。

「ツムグの嫌な運命でも見たんですかねー」

美鈴が私に話しかけてきた。

私の考へてゐる予想と同じ予想をしたらしい。

「恐らく、ツムグの危機を知らせるよつた運命を見たのだと思うわ」「見た運命が変わる事はあまり無いって聞いたことがありますよー。だから、急げつてことですかねえ」

向かう先は博麗神社だ。

今の時間なら居るだろ？

天界は空にある。

その真逆の位置関係には冥界が存在する。

白玉楼に住む西行寺幽々子と魂魄妖夢。

魂魄妖夢に西行寺幽々子から下された命があつた。

要約すると

『天界の人に協力して博麗靈夢やらを邪魔して頂戴？』

であつた。

何故疑問形なのかは聞いても無駄と分かつてゐるので単純に聞いた。

「何故ですか？」

「必要だから」

単純に答えが来た。

普段の口調ではなくハツキリと言つた。

それは珍しく真剣な様子だったので重大なことだと思い急ぎ準備をすることにした。

西行寺幽々子には思惑があつた。

ある男を自分と同じ様にする。

つまりは、亡靈にすることで自分と同一の存在とし、永遠に魂を白玉楼に縛り離別することのないようにする。

それが西行寺幽々子の思惑だ。

男には多くの知り合いがあり、西行寺幽々子が自分の持つ死を操る程度の能力で死に誘つてしまつたら厄介な事になることなど理解していた。

ならば、殺されるという事実があれば、彼を慕つものが亡靈でもいいから存在して欲しいと思うはずであり、それを理由に亡靈とする。それならば、すんなりと認めるだろう。

だからこそ、このチャンスに西行寺幽々子は動いた。

実働は魂魄妖夢だ。

失敗したならば、剣術の修行の為という逃げ道を用意してある。

よつてこの騒動は、西行寺幽々子本人は責任を追うことなく欲しい物を手に入れれる好機であり、魂魄妖夢の修行にもなるという一石二鳥の出来事であった。

「ふふ、人は遅かれ早かれ死ぬもの。成功したならそれが早まつた

だけよ」

扇子が舞う。

「楽しみねえ」

亡靈が囁く。

「はああ。折角壊した神社も建て直されちゃったし、目的の要石は埋めれないし、最近ついてないなあ」

天界から見下ろすのは比那名居天子だ。

退屈しきで考へた事であつたが、目標となる神社倒壊、要石の埋め込み、博麗靈夢の出動の内2つ達成出来たからいいかあと考へていた。

比那名居天子は天界での退屈な生活に飽々としており、事件を起させば犯人を突き止めていざれ天界に誰かが来るだろうと考へており、その訪問者を返り討ちにして退屈しきに使おうと計画していた。その為に緋想の剣まで持ち出した。

緋想の剣は気質を見極める程度の能力を持つており、確実に相手の弱点をつく事ができる。

その為、比那名居天子は負ける気など微塵もなく、お気楽に構えていたのだ。

だが、その裏には博麗神社に比那名居一族との縁を結びつけようとう魂胆があり、それは物のついで程度に考へていた。
暇潰し相手に頭の切れる人物がいれば気付いてくれるはずよね。
気付いた時の顔を見れないのは残念だけど、どう思つかしらね？

「ふふ、あ～楽しみ。この退屈な生活を充実させてくれる相手が早くこればいいのに…」

緋想の剣を地上に向けて笑う。
天人である自分がわざわざ地上に降りるなど馬鹿らしきとばかりに嗤つ。

「地に這つ者共よー 私を楽しませてー」

「あの、私はどうすればいいのでしょうか?」

永江衣玖はやることがなかつた。
正確にはくなつたのである。

空気を読む程度の能力を使用するわけではなく、ただ空氣と化していつたのだ。

なので、準備を終了してこれから天界に向かおうとする人物に話しかけていた。

拘束は解かれておりいつでも逃げ出せたのだが、私の仕事である伝言を取られてしまい手持ち無沙汰であった。

「ん? どうしよう? 萩香。まだいたよ」

「ほうつておけば?」

「酷くないですか?ー」

そもそも鬼が協力して動くつてどんな人物ですか!

「総領様のお仕置きに私も参加させてください!」

「駄目」

即答であった。

比那名居天子のお田付け役として自覚がありその責務を全うするためにも二三は引けない。

「地震を伝える仕事取つたじゃないですか！ それに、総領娘様には私も迷惑してこらんです！ だから参加させてください」

「駄目つたら駄目」

子供をあやすような言い方であった。

これ以上駄つことなしと飛ばつと踏み込んだ所にしがみついた。

「置いてかないで下をこよお」

「つわつ！ こいつ、空氣読めねえ！」

「ちよ、ちよつと失礼な方ですね！」

永江衣玖の行動は空氣を読んでいた。

「誰か知りませんが、貴女はお手柄ですよ？」

「うん、なんか知らないけど、結果的には私達に運があつたという
ことですねー」

十六夜咲夜と紅美鈴である。

永江衣玖により、ほんの少しだけ運命が変わり動き出した。

動き始めた物語は何を紡ぐのか

配点：（役者）

閑話04（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

十六夜咲夜の場合

幻想郷。

閑静な湖付近の一画。

ここに紅魔館がある。

十六夜咲夜の仕事場である。

「至高のプレゼント？」

紅魔館の主レミリア・スカーレットである。

それは、^{ねきらり}労いをしようとツムグが提案したのに対してもレミリア・スカーレットが承認した事がきっかけであった。

十六夜咲夜に日頃のお礼と勤労を労うという物である。

のだが、

「この格好は何？ 和装？ 浴衣の、脚の丈が短いのだけれど？」

格好は浴衣であるが、脚の丈が太ももを半分隠す程度まで短く加工されていた。

私と、フランは紅魔館に住んでいるから百歩譲つてこの格好を良しとして。

何故、洩矢諷訪子と伊吹萃香まで同じ格好で紅魔館にいるのだ？

「ファッショーンだよ。あとの格好の方が喜ぶはず」

浴衣を着るのは初めてだった。その為、着付けも出来る洩矢諭訪子に手伝つて貰つたのだ。

見渡す限り、見た目が実年齢と合わない容姿の人物が集まっている。それが、なぜプレゼント？

「いやー、浴衣を大胆にしたもんだね。これはコレで涼しげでいいじゃないか」

洩矢諭訪子は氣に入つた様子だ。

「腹下まで涼しいなあ。ん？ 下着なんぞ付けてるのか？」

伊吹萃香がフランの浴衣をめぐり中身を確かめていた。よし、焼き付けた。

それは私の役目だ。

いや、よくやつたわ！ 萃香。

ツムグの視線に顔を赤らめたフランドール・スカーレットに対してレミリア・スカーレットは満足する。

恥ずかしがる。

それを分かる程、常識を身に付けたといふことだ。

以前のように多少頭がおかしいということはもう無いようだ。

「萃香は下に何も履いてないね。変態？」

「いやあ。和服の下には履かないもんだよ。昔の奴らは履いてなかつたぞお」

「現代では個人の自由だ。あと、丸見えは端^{はした}ないからやめてくれ。見えてるから」

フランの間に別に気にしていない様子の萃香だ。ちなみに私は下着は履いている。

「で？」Jの格好の意図は？」

「え？ 咲夜ってアレだろ？ 口リコンで幼女趣味で可愛い子好きだろ？」

可愛い子の部分で洩矢諭訪子が反応したが、放つておこう。

「コレ見たら鼻血出して喜んで紅茶とか出すよ。最近ますますレミリア達を溺愛してるから大丈夫なはずだ」

十六夜咲夜は困惑していた。

客室で待機しているのだ。

やることもなく、ただ待つ。

レミリア・スカーレットから待つように指示があつたのだが、ツムグが良い笑顔であつたのが困惑の原因である。

何かある。

それが予測できぬでいた。

だが、直ぐに答えは出たのだ。

ノックの音が部屋に響く。

「おー。いた。まあ来いよ。良いものが見れるぞ」

そつこつて案内された部屋には天使達が居た。

「これは…」

こんなに可愛いレミリア・スカーレットが私の主なはずない。

とこうか、何この空間。

浴衣に生脚。

幼女。

天使。

「ふ、ふふふ。おぜう様方。お飲み物は紅茶でよろしいですか？」

この日の十六夜咲夜は笑顔に鼻血といつ状況であった。

床にスプーンを落とす。

生脚を見る。

しかし、決して触らず愛てる。

白々しいが、笑顔であった。

それが、プレゼント？

と割り切つたレミリア・スカーレットと、気にしない他の者。伊吹萃香の中身を見た十六夜咲夜は発狂する。

「フオオオオオ。は、履いてないつー。」

「諏訪子。可愛いよ。諏訪子」

「妹様ペロペロ」

「萃香にやーん」

「おぜう様。パンツ丸見えです。誘つてるのですか?ー。」

口づによる口リの為の口リ。

配点：（変態紳士十六夜咲夜）

井の内で反省していない。

第十六章 紅魔館の騎士達（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

宴会だ。

それは地下で行われていた。

主役は星熊勇儀と風見幽香だ。

勝負は引き分けになり、互いに戦つた戦友として一人は認め合っていた。

そして、酔つていた。

伊吹萃香の姿はいつの間にかなく、宴会なのに珍しい事もあるもんだと星熊勇儀は思つていた。

その答えを風見幽香は言つ。

「だつて、地上で愛しの男が呼んでるつてパルシィがさつさ萃香に言つてたわ」

「ん？ 萃香にそんな奴いたのか？ それに幽香は行かなくていいのかよ」

幽香は酒を飲んだ後答える。

「どこの誰かのせいで歩きたくない程疲れてるもの。それに、いい女はここぞと言つ所で現れるものよ」

「ハツ、笑わせる。しかし、萃香に男かあ」

見た目がアレだ、幼いがいいのか？ と思つ。相手の男はモノ好きだなあ。

嘘を付いていた。

切り札と奥の手には違いがある。

切り札は逆転を導くものであり、頼りにできるものだ。奥の手は必殺、必勝に使うべきものであり滅多に使うことのないものである。

ツムグの持つスペルカードは奥の手に近い役割を持つ。

その効果を知っているのはスペルカード制作に協力した博麗靈夢だけである。

スペルカードを所有している事は何人も知っているがその効果も、使用した所も誰も見たことがない。

故にツムグの切り札はスペルカードだという認識が共通するものであつた。

力を分け与える程度の能力を持つツムグのスペルカードに興味を持つ者も多かつたが、ひた隠しにその内容を教えることはなかつた。ツムグはこの異変に対してもスペルカードを使う事を心に決めていた。それを使う相手は異変を起こした張本人である比那名居天子に対して使用する事であり、今の状況で使うべきではないと考えていた。

十六夜咲夜と紅美鈴。

この二人が組むと接近戦に紅美鈴。そのサポート、遠距離攻撃に十六夜咲夜が役割を持つ。

十六夜咲夜が時を止め、その中で相手の動きをコントロールし紅美鈴の有効範囲内に導くパターンがある。

つまり、どんな人物でも接近戦の肉弾戦を強制されるのだ。

そして、ツムグの存在が厄介なものであり供給元を絶つ為にツムグ相対する的是紅美鈴であった。

人間と妖怪である。

妖怪の速度に人間が敵うはずもなく、逃げるという選択肢は下策。さらに、協力者である鬼。伊吹萃香の相手は十六夜咲夜である。

十六夜咲夜は勝利する為に戦うのではなく時間稼ぎを主体にした攻

守を心がける。

十六夜咲夜、紅美鈴の二人の目的はツムグを捕縛することであり、どちらか片方がその目的を果たせればいいと考えていたのだ。二人の間違いはツムグの能力が供給しかないと思っていたことだ。

紅美鈴とツムグの相対は攻守がハツキリしていた。

紅美鈴が攻撃でツムグが回避であった。

紅美鈴は身体に掛かる重さと、ツムグへの攻撃が全く当たらない事に焦りを感じていた。

当たらない。

こちらが近づけば、確実に距離を取られる。

まるで、私に弾かれる様に避けるのだ。

普段より気を充実させて動いている。

足元、自分の地面は凹む。

それは重さである。

重力と斥力。

重力の方は重さを表すなら数トン。

斥力とは簡単に言つなら磁石のS極とS極が反発する力のことである。

ツムグは己の服と紅美鈴自身に斥力。

紅美鈴の身体に重力。己の服と靴に無重力を供給していた。

避けているのではなく、拳圧と斥力、それに無重力を使い流れているのだ。

それは空を飛んでいる蝶にパンチを当てるようなものである。

妖怪の相手は妖怪に。

人間の相手は人間で。

それが正しい選択であつたのだ。

それを能力を主体に考慮した上で相対の相手を決めてしまった十六夜咲夜の失策であった。

この事に気付いているのは四人の中でツムグであった。
後ろから時を止めて俺を捕縛して氣絶させてしまえば抗う術はなかつたと思つ。

何故それを行わなかつたのか？

その理由は高貴なレミリア・スカーレットの名を汚す行為をするのが出来なかつたと予測していた。

堂々と戦い勝利して奪つていく。

強者たる者の考え方なのかその辺りの考察は無駄であると感じた。

十六夜咲夜の間違いはいつもの伊吹萃香を前提とした戦術を取つていた事である。

いつもの伊吹萃香ならば弾幕ごっこで勝つこともあるし、負けることもあるが時間稼ぎを主体に攻防すればそれが叶うと思つていたのだ。

しかし、伊吹萃香は地下で見た戦で猛つていた。

伊吹萃香はいつもは加減しており、適度に手を抜いて弾幕ごっこを均衡した戦いに持ち込んで飽きたら負けた。遊び相手に本気を出しまでなく、それなりに楽しめればいいと思っていたのだ。

それが、地下で見た戦で火が付いていたのだ。

ツムグに呼ばれていると地上に戻つてみれば天界に殴り込みに行くというではないか。

渡りに船と喜び、協力者として付いて行くことに一つ返事で承認したのであった。

そこに邪魔者が現れたのだ。

「あんたと私では格が違いすぎる。人間風情が！ 我ら鬼に敵うと思つた！」

飛ぶ。

どこからともなく岩が萃まる、一瞬で十メートル程の岩の塊ができる。

それを眼下にいる十六夜咲夜に向けて投げた。

辛うじて時を止める事により、岩の塊が自身の数センチ先で止まる。伊吹萃香の姿が消えたと思つたら上空から岩が振ってきた。

催眠術だと超スピードだとそんなチャチな物ではないもつと恐ろしいものの片鱗を味わつた。

それは鬼の実力の片鱗である。

岩の塊を抜けて反撃に移る。

が、伊吹萃香の姿はなかつた。

大気中に霧散していたのだ。

十六夜咲夜に戦慄が走る。

岩の投擲からを私が時を止めて避ける事を読めた。

その事実と時を動かすまで攻撃はできないという現実があつた。

つまり、こちらの攻撃は通じず相手の攻撃は通じる事になる。

伊吹萃香の実力を侮つていたわけではない。

だが、日々の付き合いで油断していたと猛省する。

紅美鈴は視線の先の人物を観察する。

普段は付けていない革の手袋にブーツが目に付く。

ブーツは地面より数ミリ浮いており、両の手を開いて前に置き腰は

深く落とされていた。

まるで浮いているブーツの上をバランスを取るような重心である。己の拳が当たらないことは分かった。
ならば己の気を放つ攻撃ならどうか？

華符：「破山砲」

円球の気の塊が七色の光を放ち両手から先の相手に砲撃される。

あー！
手加減できなかつた。
あわわ、やばいですよー。

集約され放たれる七色の球体に対してツムグは素早く両手を向けて七色の球体を防ぐ。

両手の手袋に最大の防御力を供給するのだが、受け止めて支える腕の筋力は人間の物である。

自分自身の力の無さを自覚しているツムグは己の出来る事、出来無い事を明確に把握していた。

防ぐのは無理。

ならば、考えを変えよう。

逆に考えるんだ。別に吹き飛ばされてもいいや、と。
足の力を抜き、ブーツに無重力を供給。

そして、浮くと共に後方へ加速していくのを感じた。

美鈴の放つた攻撃は「の字を書くように放物線を描く。
つまりは、空に打ち上げられる攻撃であった。

その先には天界の入り口があり、奇しくも砲撃に乗つてツムグは天界に辿り着くのであった。

無理のある戦い。

それを強行するのは誰か

配点：（作者）

三パターンくらい迷った末に当初のを採用。

第十七章 図書館の優等生（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

懐かしいと思うにはまだ早すぎるが、それでも日々の濃い生活のために懐かしいと感じた。

伊吹萃香はツムグの格好を懐かしいと感じていた。

それは異変解決を手伝う時の本気装備という奴である。

ツムグ本人がそんな事を言っていたな。

革の手袋とブーツを着るだけなんだけど、アレがまた厄介な代物だつたな。

徒手空拳と思つて油断したら一杯食わされるつて嫌らしい戦い方だ。ま、それも含めてアイツらしいと思つ。

相手と力の差があるなら正面切つて戦うのは下策。罠、奇策、謀略使える物を全て使って汚くても勝利するという思考の持ち主だ。

それを時と場合で使い分けているから、たちが悪い。

美鈴も唖然としている。

まさか、砲撃に乗るなど思いもしなかった。

柔軟な発想というか、バカな思いつきだなーと思つ。

飛んで追撃するにも間に合わない。

既にツムグは天界に入ってしまった。

ならば、咲夜さんに加勢するべきだ。

だが、十六夜咲夜の相手の姿は無く、珍しく十六夜咲夜の戸惑いの顔を見たのだ。

己の失策の結果が現実として眼の前にあつた。

捕らえるべき相手はおらず、押しとどめる相手にも逃げられた。
追うか？

それとも一度、主に報告して準備を万全にしてから指示を仰ぐか。
その答えを持つ者が現れた。

「レミィが一度帰つて来いって。ああ、ツムグは私が追いかけるか
ら後から追いつきなさいよ」

パチュリー・ノーレッジである。

随分行動的になつたものだと思うが、この異変に感づいて動いてい
る所に主が声をかけたのだろうと予測した。

同時にこの異変が主にとつて重大な出来事があると確信させる。
友人であるパチュリー・ノーレッジにもツムグ捕縛を頼むとこうい
とは、やはりツムグの生命に関わるのだろう。

その疑問に答える形でパチュリー・ノーレッジが言葉を放つ。

「レミィがツムグの運命を見たわ。青い髪の女に剣を突き刺される
運命らしいわ」

それは、つまり。

「アイツには死ぬ運命が待ち構えているわ

パチュリー・ノーレッジは言い過ぎたかな？ と思つていた。

レミリア・スカーレットが見た運命はツムグは刺されるといつ運命であり、死ぬ所を見たわけではない。

普通に考えれば剣で刺されれば死ぬだろうが、相手はツムグである。いざという時の保険はあると思うし、誰よりもツムグ自身が打たれ弱い事を理解しているので余り心配はしていない。

全く、レミイは心配性ねえ。

それでも、咲夜と美鈴の顔が真剣味を帯びたのは良い事だと思つ。訂正しない方が面白しそうね。

これがどういう結果を出すのか、それも楽しみだわ。

パチュリー・ノーレッジは些か意地の悪い思案をしていた。

自分の考えを伝えないことで一人がどのような結果を見せるのか。その辺りの答えを知るためにも敢えて黙つていようと考えたのだ。もつと最高のタイミングで事実を伝えた方が面白くなるはずで、今後彼に関わつてくるであろう人物達にも彼が死ぬ運命を持つという事を公に伝えてやろうと決意したのだ。

その思案を知らず、十六夜咲夜と紅美鈴は急いで紅魔館へ向かつたのだ。

「ふふ、やつぱりツムグに関わると面白いわね」

霧雨魔理沙は出遅れたと痛感していた。

蟲がツムグの伝言を持って来たのだが、その時は不在であった。魔法の材料を調達しており、そこで事の始まりを知つたのだ。

一度、自宅へ戻り準備を万全にして博麗神社に向かつたのだが、到着した時には主と居候の姿はなく代わりに魔法使いがいた。パチュリー・ノーレッジである。

そのパチュリー・ノーレッジによると、レミリア・スカーレットが

ツムグの死ぬ運命を見たというではないか。
ならばどうするべきかと考えるまでもなく。

「止めに行くぜ。靈夢が異変を解決するだらつから安全策を選ぶのが無難だぜ」

それは、至つて普通の考え方である。

異変解決は博麗靈夢に任せて、死ぬ運命を持つてしまったツムグを異変解決に参加させずに保護する。

死にはしないだろうが、死ぬかもしない。

ならば安全な場所で異変解決まで保護し、運命を変えるのが正しい考え方だ。

また、その運命の事を本人に伝える事も必要である。
ツムグは自分の力量を理解しているはずであり、レミリア・スカラレットの能力の事も知っている。

事実を知れば自ら異変解決を降りるかもしれない。

なら、自分は全速力でツムグを追いかけて、事実を伝える。それが駄目なら力尽くで止める。

それだけだ。

人それぞれの反応にパチュリー・ノーレッジは満足していた。

図書館で手に入る知識と実地での知識。

知識が手に入る事は嬉しいことであり楽しいことだ。

心理学の問題ね。

以前なら

『助けに行くぜ!』

『先に私が解決してやるぜ!』

という反応を示したはずだ。

それが、少し変化したのだ。

止めに行くと言った。

それほど、魔理沙の中でツムグという人間が大切な存在になつているのだ。

男女の関係が心の変化に及ぼす実例ね。

本人は気付いてないけど。

ならば、ツムグが本当に殺されたら皆はどういった反応を示すのだろう。

そして、私はどういう心境になるのだろう。

好奇心だ。

しかし、それは無いわね。

私も変化している。

自覚はある分、厄介ね。

ツムグを愛おしいと思う。

それは彼が持つ能力も含めているのだが。

思い出すのは退屈しない日々とやはり、初めて会つた時の事である。

初めて会つた時、彼は全裸だった。

それ自体に驚くほど乙女ではない。知識として知つてはいるからだ。だが、股間を隠す魔力と靈力の複合技術に興味が湧いた。

確か、

『ああ、魔力と靈力の複合技術ね？ 全く無駄な技術ね』

と彼に言い放つた記憶がある。

その後、ツムグの能力が力を分け与える程度の能力と知つた。

股間を隠す技術は能力を使用したものであり、全く持つて無駄な技術であった。

どのようにすれば股間を隠せるのかは企業秘密と言つて未だにわからぬが、知る必要もなかつたので追求はしなかつた。

そもそも、何故紅魔館の図書館に来たのかと問つた。

『レミリアが図書館に行けば面白いものがあるわよつて言つたから来た』

私の事だらうか？

その後も色々とあつた。

印象に残つてゐるのは侵入者の魔理沙を説き伏せて本の盗難が無くなつたことである。

それにツムグ自身魔法に興味があり一人して教鞭をとる事もあつた。出来の悪い生徒程可愛いという言葉の通り。ツムグは出来が悪かつた。

魔法の実行や開発よりも魔法の歴史や生い立ちに興味が強くその起源を聞かれる事が多かつた。

『 というわけよ。わかつた？』

『 その魔法がすごいことは分かつた。その人の考え方やソコに至るまでの思考や何故そんな魔法を開発したのか？ つてのが気になるけどわかる？』

変わつたアプローチの仕方だと感心した記憶がある。

だが、

『 つまりは、自分の開発したオナニーすげえだり？ ビツよ？ 真似できるもんならしてみろよつてことだな？！』

物凄い自己解釈ね。

あながち間違つていない所が腹が立つ。

『ぐへへ。パチュリーのオナニーはどんなオナニーなのか、お兄さんに教えて『じらん？ つてやめて！ スペカ使うなんて！ 俺が燃えちやうづ』』

その後も色々とチョッカイを掛けたり、テーブルの下からスカラートの中を必死に覗こうとしていたり、図書館にエロ本をいつの間にか紛れ込ませていたり碌でもない事が多かった。いつしかツムグが訪れるのを楽しみにしている自分がいることに気が付いた。

そして、それが恋心などというものであるのか、それとも単に友人が来るのが楽しみであるのか。

どうしても分らなくて知識を貪ったのだが、その答えを記す書物はなく、後に実体験を経てそれを愛だと知ったのだ。

動かない魔法使い。

知識に囮まれ知識に溺れる。

配点：（図書館）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7538y/>

境界線上の幻想郷

2011年12月19日12時48分発行